第３８回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催　　水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援　　文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
　　水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構・全日本中学校長会

第３８回　全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和 52 年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である８月の初日を「水の日」（8 月１日）とし、この日を初日とする一週間（8 月１日～7 日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和５４年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

一昨年 3 月に水循環基本法が成立し、8 月 1 日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

全国（海外を含む）の中学生から１５，２４６編（学校数３１４校）の応募があり、今回は自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちがよく表現されたもの、今年 4 月に発生した熊本地震に対する思いを綴ったもの等がありました。このたび、入賞作文３６編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用ください。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構及び全日本中学校長会等関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成２８年８月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和 52 年５月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている８月の初日である８月１日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解

昭和52年５月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め 、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年８月１日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成 26 年３月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第 10 条において、「水の日」が８月１日と規定され、国及び地方公共団体は水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条　国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

２　水の日は、八月一日とする。

３　国及び地方公共団体は、水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞（一編）

《内閣総理大臣賞》 水がつなぐ自然と家族 富山県 高岡市立五位中学校 三年 前田 野乃葉 2

優秀賞（九編）

《厚生労働大臣賞》 命を守る貴重な水 栃木県 宇都宮短期大学附属中学校 二年 安藤 萌々愛 3
《農林水産大臣賞》 「水は命。」 宮崎県 宮崎市立生目台中学校 二年 吉永 茉利香 4
《経済産業大臣賞》 大切な水のためにできること 神奈川県 聖園女学院中学校 一年 関 日陽 5
《国土交通大臣賞》 かわのかお 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 三年 小川 知映 6
《環境大臣賞》 水は誰のもの？～水のリレー～ 京都府 京都市立西京高等学校附属中学校 二年 河井 紀乃 7
《全日本中学校長会会長賞》 祖父が教えてくれたこと 北海道 長沼町立長沼中学校 二年 池亀 廉 8
《水の週間実行委員会会長賞》 「生きる」につながる「水」 沖縄県 多良間村立多良間中学校 三年 山川 梨緒 9
《独立行政法人水資源機構理事長賞》 水の大切さ 大阪府 四條畷学園中学校 二年 石谷 優翔 10
《全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞》 限りある資源、水 埼玉県 川越市立初雁中学校 二年 山口 夏果 11

入選（二十六編）

北海道 長沼町立長沼中学校 三年 倉田 友美 12
青森県 むつ市立むつ中学校 一年 井上 凜士 13
岩手県 花巻市立東和中学校 一年 菅原 颯 14
宮城県 石巻市立河南西中学校 三年 土田 琴未 15
福島県 泉崎村立泉崎中学校 三年 鈴木 梨沙 16
福島県 白河市立白河南中学校 三年 関根 佑治 17
茨城県 茨城県立古河中等教育学校 三年 茂呂 碧斗 18
茨城県 筑西市立下館中学校 二年 栗野 遥貴 19
栃木県 茂木町立中川中学校 二年 糸井 あゆか 20
群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 髙井 智大 21
神奈川県 サレジオ学院中学校 三年 山本 雄介 22
長野県 伊那市立伊那中学校 三年 柳澤 侑美 23
静岡県 静岡県西遠女子学園中学校 三年 田中 朱理 24
三重県 高田中学校 一年 水野 亜美 25
京都府 舞鶴市立城南中学校 三年 中村 姫菜 26
岡山県 岡山市立吉備中学校 一年 稲田 知陽 27
山口県 高川学園中学校 一年 田中 美伶 28
徳島県 阿南市立那賀川中学校 二年 松本 遥花 29
香川県 坂出市立東部中学校 二年 竹村 舞祐 30
愛媛県 松山市立椿中学校 三年 芝辻 隼人 31
愛媛県 新居浜市立西中学校 二年 松本 彩花 32
大分県 豊後大野市立緒方中学校 三年 佐藤 千春 33
宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 崎村 宙央 34
宮崎県 高千穂町立高千穂中学校 三年 黒木 陽斗 35
鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校 三年 福山 美桜 36
沖縄県 宮古島市立北中学校 三年 奥平 芽衣 37

資料

第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 38
第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 39
第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 40
第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 41
第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 42
第三十八回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 43

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水がつなぐ自然と家族

富山県　高岡市立五位中学校　三年　　前田　野乃葉

「うわぁ、こんな景色見たことないよ。」

思わず口からこぼれでた言葉。私がまだ五歳の時のことだった。八時迄には寝ていた私が、少し遅くまで起きていられるようになった夏の夜、祖父が家から車で三分ほどの川べりに連れていってくれた。そこで目にしたのは、漆黒の空に飛び交う箒星のような光と、繰り返す光の点滅がまるで季節外れの天然のクリスマスツリーのように見える山の木々だった。その日見た自然の幻想的で美しい光景を超える光景に、私はまだ出会っていない。そして、その夜聞いた祖父の言葉も忘れ難いものとして、私の心に鮮明に残っている。

「蛍は水のきれいな所にしか住めん。蛍のおるこの景色、野乃葉に見せれて良かった。絶対に見せてやりたかったんやぁ。」

私の住む石堤地区は、東は小矢部川、西は西山丘陵に囲まれて、蛍の大群以外にも様々な鳥や生き物をみかけることができる自然豊かな地域であり、この地区で獲れるお米は『川西の米』と呼ばれ、小矢部川の豊かな水流と粘土質の土壌のおかげで粘り気が強くて甘味があり、冷めても美味しいと評判だ。私の祖父も兼業農家なので、田植えは家族親戚一同総出の一大行事である。田植えが終わると夕方田んぼの水量を見回る必要があり、祖父は必ず私を誘った。私はその仕事を『水パトロール隊』と名付け、隊員として一生懸命任務隊行した。任務中、祖父は昔の小矢部川は汚濁していて、かんがいや排水の欠陥も多かった為に水稲の腐敗や枯死などの被害があったこと、干ばつが起こると田面の亀裂、茎葉の萎縮が起き、収穫が下がり農家の経営が不安定で大変だったこと、用水を守り田園を保つことが、水辺の環境整備につながり、様々な生き物や植物の生育を育み、しいては自然豊かな景観の保全へとつながることを、分かりやすく話して聞かせてくれた。私は用水路が整備され、安定した水の恵みで美味しいお米がたくさんとれることのありがたみを感じると共に、自然保護の重要な役割の一端を担う農業に携わっている祖父を誇らしく思った。水量確認だけでなく、道中のゴミ拾いも任務の一つだった。私は自分にもできる事があることが嬉しくて仕事に励んだ。

小四の夏休みには、五位庄地区開催の「フィルムで残す農業用水と暮らし」の活動に参加した。社会科の授業で用水の歴史を学び、自分もこの景色を後世に残す手伝いがしたいと思ったからだ。

地域のこのような活動以外にも、富山県には「クリーンウォーター計画」なるものがあり、そのおかげで汚濁していた小矢部川も今では美しい川となっている。富山県は名水百選のうち、全国最多の八ヶ所が選定されているが、それは与えられた環境によるものだけでなく、「清らかな水をより清らかにしようとする努力」、「“豊かな自然環境は県民の財産”との考えを広める活発な活動」、「水の大切さを伝える家族のつながり」がもたらした結果だと思う。

我が家では、食器は洗剤不要なアクリルたわしで洗う、シャワーは節水など、些細なことだが、当たり前のように家族全員が行っている。水は自然がもたらす恵みで、あらゆる生命の源になるもの。その循環型資源の水を人間は汚さないように、ありがたみをもって使うこと、水の大切さを意識した行動をとらなければいけないことを、私は、家族を通して学んだ。水を守ることは、次の世代のことを思いやること、そしてその『思い』をつなげていくことに他ならないと私は思う。

あの夏の夜、祖父が私にプレゼントしてくれた景色を、今度は私が自分の子供や孫にプレゼントするその日まで、私はこれからも日々『水』のもたらす恵みに感謝しながら、この豊かな自然に囲まれた素晴らしい水環境を守る努力をしていきたい。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

命を守る貴重な水

栃木県　宇都宮短期大学附属中学校　二年　安藤　萌々愛

「蛇口から直接水を飲むなんて?!」私にとっては大きな衝撃でした。私が幼いころ住んでいたアメリカでは、水は「買うもの」でした。私たち家族はウォーターサーバーにミネラルウォーターの入った大きなボトルをセットして、そこから水を飲んでいました。

また、ミネラルウォーターを注文していない家庭では水道の蛇口に必ずフィルターをつけていました。アメリカの水道水は塩素の強い硬水で、ピリピリとした感じがします。私は日本に帰国して当たり前のように家族が水道水を飲んでいるのに驚きました。現在我が家はミネラルウォーターを購入していないし、水道にフィルターもつけていません。

それでも私は日本の水道水が大好きです。こうして水道の水をおいしく飲めるということはとても幸せなことだと実感しています。

また日本のレストランに入ってとても驚いたことがありました。私たちが席についた途端にまだ何も注文をしていないにもかかわらずお店の人が私たちにお水を運んできます。アメリカではお客が頼まない限り水は出てきません。水には値段がかかるのです。

水を無料で提供するということは日本のおもてなしの文化によるものだと思いますが、それだけ日本の水はおいしくて安心して飲めることが、世界中に証明されているのではないでしょうか。

私はアメリカの学校にいたときにハイチという国の子どもにプレゼントを送ったことを覚えています。先生の説明ではハイチの人は飲料水を口にすることができる人は少なく、多くの人は飲み水には適さない水を利用しているそうです。その水には虫や菌が混入していて感染症や下痢を引き起こします。ハイチでは乳幼児の死亡率が高く、その原因の第一位は下痢であることも不衛生な水と関係しています。また、遠い水源まで水汲みをさせられる子ども達の中には、家事手伝いに時間を取られ、学校に行くことができない子どももいます。夜明け前に起き出し、暗く危険な道を通って水を汲みに行かなければなりません。

まだ幼かった当時の私はハイチの子ども達にぬいぐるみを送りましたが、今なら少しでも安全な水を届けてあげたいと思います。

今年四月に大地震が熊本県を襲いました。現在も多くの方々が避難所で不自由な生活を強いられていますが、先日テレビの報道番組で実に印象的な言葉を耳にしました。「今、一番必要なものは何ですか。」そう、レポーターが現地の方々に尋ねたところ答えはすぐに返ってきました。

「水です。」

私の母は約二十年前に阪神大震災を経験しています。母の住んでいた東灘区は倒壊した家屋が多く、救援物資はなかなか避難所に届けられなかったそうです。水道の水が出るようになったのは震災から三ヵ月たった後でした。一日一回給水車が来たときにタンクをもって、飲み水を確保したそうです。またトイレの水も流せず不衛生な状態が続き避難所での生活は大変だったそうです。入浴する水もなく水のいらないシャンプーを買い求め、水が出る大阪の方まで通ったりしたそうです。

蛇口をひねれば当り前のように水が出て、安心しておいしい水が飲めるということ、このことはとても貴重なことだと改めて今感じます。水は私たちの命を支えてくれています。

アメリカの高校生たちはハイチにボランティアに行って手洗いの仕方を教えたり建築作業や農作業を手伝っていました。私が将来、国内外で様々なボランティアに参加することができるならば、世界中の人々が安心して飲める水を提供できるようなお手伝いをしてみたいと思います。その夢の実現の前にまず自分が水の大切さを認識し、水に感謝し、そして一人一人が水を大切に使うことができるように訴えていきたいと思います。このことが私にあたえられた使命だと考えています。

農林水産大臣賞（優秀賞）

「水は命。」

宮崎県　宮崎市立生目台中学校　二年　　吉永　茉利香

小学校の頃から給食で毎日飲んできた牛乳。暑い夏、体育の授業後に飲む牛乳は格別だ。グイッと一気に飲んでしまう。栄養価が高く、私たちの体を健康にしてくれる牛乳に、実は水が深く関わっていることをどれだけの人が意識しているのだろうか。

私の祖父の仕事は「さく井業」。簡単にいうと「井戸工事」だ。祖父は若い頃からたくさんの井戸を掘って水を汲みだし、いろいろな人や仕事に必要な水を供給してきた。祖父のこれまでの仕事の中で、印象に残る一つに一軒の牛農家での井戸工事があった。

「牛の飲み水が出ない。このままでは、牛乳の生産ができない。」

私がまだとても幼かった頃の正月、祖父にこのような一本の電話があった。それが、この牛農家からのものだった。正月といっても農家には休みはない。水の確保はすぐにでも何とかしないと牛の命に関わる。祖父と父、そして父の兄弟達は、急いでトラックにポンプや工具などの荷物を積み、牛農家へと出て行った。無事に工事は終わって、牛の飲み水が出るようになったそうだ。

「茉利香たちがおいしい牛乳を飲めるのも、水のおかげ。」

そうやって笑顔で祖父は牛乳と水との関わりを話してくれた。

祖父は長いさく井の仕事で、多くの井戸を掘ってきた。酒屋さんや動物園の井戸も掘ったという。祖父は私に言った。

「水は命。水がたった十分だけでも止まってしまったら、人間も動物も植物も、全てのものが困るんだよ。」

そんな話を聞くと、命をつないでいくために水がどれだけ大切かひしひしと伝わってくる。祖父の話は続く、

「水は、酸性が強くなるとまずくなってしまう。水の性質は、全ての食品のおいしさを左右するんだよ。」

それを聞いて、私は驚いた。水の性質が食べ物の味にまで関わっているなんて。祖父の話を聞いて何だかうれしくなった。水の性質を熟知し、たくさんの水を届け感謝されてきた祖父の仕事は本当に重要な命をつなぐ仕事だと自信をもって言えるし、自慢できるからだ。「水は命。」という祖父の言葉は私にとってとても意味のあるものとなった。

そんなとき、その祖父の言葉の重みを更に感じさせてくれる災害が起こってしまった。四月十四日に熊本で大きな地震があった。家も壊れ、学校等の施設や車の中で生活しなければならなくなった人が大勢いる。テレビ映像で、アナウンサーが避難生活をしている人にインタビューしている姿が映された。

「今、一番何が欲しいですか。」

「水です。」

どの人も水が欲しい、水が不足し困っていると答えていたのが心に深く残った。考えてみると、水は単に飲み水として使われるわけではない。私たちが日常生活を送るとき、どれだけ水を使っているか、水が止まって初めて気づくのだ。実際、私の住んでいる生目台地域でも、平成十七年夏の台風で、宮崎市の浄水場が水没したことにより、水の供給が止まったことがあるそうだ。私はまだ小さくて覚えていないのだが、今回の地震の時と同じように、自衛隊の方々に給水を受け、本当に助かったという話を聞いた。

「水は命。」と祖父が言ったように、水がいかに多くの命を生かしているか、今実感できる。水がなければ命はつながらない。水があるからこそできることが数え切れないほどある。さく井業で水と深く関わりながら生きてきた祖父の言葉だからこそより重く感じられる。努力家の祖父は今も元気に水を届ける仕事を続け、命をつなぐ。私には何ができるだろうか。「水は命。」という言葉を多くの人に伝えることが私の第一歩かもしれない。

経済産業大臣賞（優秀賞）

大切な水のためにできること

神奈川県　聖園女学院中学校　一年　関　日陽

「わーっ、きれいな水ですね。」シュエちゃんは、感動した様に目をキラキラさせて言った。「私の国ミャンマーは、水道から出る水も茶色くにごっていたりするの。だから、水道水を飲むなんて、絶対出来ないのよ。」シュエちゃんは、ミャンマーから来た留学生だ。私の家にホームステイをしている時、蛇口をひねればきれいな水が出ることに驚いたようだった。さらに、二人で食後の皿洗いをしている時のこと、水を流しっぱなしで洗う私に、シュエちゃんはこう言った。「水は大切よ。おけに水をためてここである程度洗ってから流さないと、水の無駄使いよ。」私は、その言葉に衝撃を受けた。水が大切だということが頭でわかっていても、普段意識したことなど一度もなかったからだ。当り前の様に、きれいな水を飲んだり、使ったり出来るのは、発達した日本の浄水、下水道システムのおかげであり、それは世界から見れば、贅沢でありがたいことなのだと、はじめて知ったのだ。

私の祖父は、終末処理場で働いていた。終末処理場とは、生活で使った水や雨水などをきれいに浄化し、川にもどしている施設だ。祖父に、日本の下水処理についてたずねてみた。祖父は、研修の一環で、海外の下水処理施設を視察に行った経験もあるが、やはり日本の施設は、世界の中でも非常に優れているのだそうだ。しかし、悩みもある。それは、終末処理場に集まる汚水の中に、油や食べ残しなどのゴミが多く混入していることだそうだ。その処理のために、多くのコストがかかるらしい。もう一つ、リン系の洗剤が流されること。リンは、水の汚れをきれいにしてくれるバクテリアが食べてくれないのだ。どちらも、下水を利用する私達一人一人が意識を持てば、改善できることだ。流す水にゴミが混入しないようにすること、無リン系の洗剤を使用すること。私は水を大切にする一歩として、さっそくこの二つを実行してみようと心に決めた。祖父の話には、もう一つ興味深いテーマがあった。それは、終末処理場に集められる汚泥から発生するメタンガスを使って電力を生み出す研究が進み、少しずつ実用化されてきているということである。廃棄物が再利用され、それがエネルギーとなり、また利用されれば、よい循環を生む。「もし汚泥から、膨大なエネルギーが生み出せたら、世の中が変わるだろうね。」という祖父の話を聞きながら、もし叶うなら私もその研究にたずさわる仕事がしてみたいと思った。とても夢のある研究だからだ。

今年四月、熊本地震が起き、浄水場、下水処理場共に被災して使用不可となり、生活用水の供給、下水道の復旧が今現在も完了していないという。お風呂に入る、衣服を洗うといった生活に密着した水の不足は、避難所でくらす被災者の方々をどれほど苦しめているだろう。トイレを流すことが出来ず、衛生的に過ごすことが出来ないことが、どんなにストレスになるだろう、と想像するだけで、心がぎゅーっと苦しくなる。一日も早い復興を祈らずにはいられない。

世界には、そしてこの日本にも、ほんのわずかな水を求めて苦しんでいる人がいる。シュエちゃんの様に、水道をひねっても汚れた水しか出てこない、不自由な生活をしている人も大勢いるのだ。その人々のことを決して忘れてはいけない。発達した浄水、下水道システムを使っていけることに感謝し、そのエネルギーを無駄にしないこと。そしてなにより、今の私に出来ること、使える水を大切にすること、流す水にも気を配って生活することを心がけたいと強く思う。それが例え小さな力でも、皆が取り組めばいつかは、世界中の人々が豊かな水を享受出来る日が来ることを信じて…。

国土交通大臣賞（優秀賞）

かわのかお

群馬県　群馬大学教育学部附属中学校　三年　小川　知映

「おっ！」

今日の川は一段ときれいだなぁ。澄んだ雪解け水に真っ青な空が映って、違和感を覚えるほどきれいに染まっている。近くの堤防の辺りには一面の菜の花、そして桜並木。

私は、自転車通学のために毎日渡る南部大橋で、素敵な“かわのかお”を見た。その川とは、流域面積日本一を誇る、利根川だ。

川は、季節やわずかな天候の違いで様子が変わる。

夏の晴れた日は、川面に強い日差しが照りつけ、キラキラとまぶしい。音を立てて流れる川に、思わず飛び込みたい衝動に駆られる。さすがに怖いので、入ったことは一度もない。

台風や大雨の後は、空は晴れているのに川は不機嫌そうな表情になる。濁った水が、折れた枝や人工物を乗せてごうごうと流れる。たくさんの石が転がっている川岸をも飲み込んでしまうので、それを見た私の機嫌もちょっとだけ悪くなる。

冬は、利根川の流れに沿うようにからっ風が吹きつけ、私はとにかく寒い。そして川も寒そうに波を立てているが、私の気力のように凍り付くことは決して無く、渾々と流れるがまん強さ。尊敬の意を向けたくなる。

このように、利根川は私に、癒やしやたくさんの思考を与えてくれる。自転車で橋を渡るのは往復ほんの二分、それもまだまだ二年間だが、いろいろな“かお”を見られるのは実におもしろい。

そんな利根川は、自然と共存する難しさについても考えさせてくれる。

母に聞いた話によると、今から二十年ほど前、大雨による洪水があったらしい。利根川の河川敷にあった県庁の駐車場などは全て泥水に飲み込まれ、県職員さんのほとんどの自動車が流れてしまったのだという。

利根川は大昔から流れる場所が変化しているようで、前橋の市街地の辺りをかつて流れていたこともある。今、流れている場所と結構離れた場所を流れていたことを知り、自然の力の強大さに驚き、怖くなった。何十、何百年に一度かくらいの、川の“怖いかお”。

川は人間の生活についても考えさせてくれる。朝起きてきれいな水で顔を洗えるのは、利根川のおかげだ。

小学生の頃に浄水場の見学に行き、この辺りの水道水は利根川の水をきれいにして使い、再び浄化して川に戻していると教えて頂いた。

人類が文明を拓いたのも川のほとりだ。飲料水として、調理の為の水として、衣類や身体を洗う水として…。現在にも同じことが言える。水道設備が整ったので住居はあちこちに建てられるが、人間が生活するには水が不可欠だという事は、この先も変わらない。

よく考えると、川の河川敷の菜の花、桜、川面を跳ねる鳥たちなど、人だけではなく全ての生きものの生命の源なのだ。“水”に感謝と敬意を、改めて示したい。特に利根川は、流域に住む私たちの街・平野の母のようだと思う。

“かわのかお”。それは人間の心に癒やしや思考を与えてくれる、非常に豊かなかお。

それは時に荒れ狂い自然と共存する難しさと大切さを教えてくれる、実は優しいかお。

それは生きものたちが生きていくのを支え、毎日毎日、愛情を注いでくれる母のかお。

ふるさとの利根川、そして地球上の水を守るため、これからは水の使い方をよく考えながら生活していきたい。また、愛する利根川の“かわのかお”を、もっと見つけたい。

環境大臣賞（優秀賞）

水は誰のもの？～水のリレー～

京都府　京都市立西京高等学校附属中学校　二年　河井　紀乃

「ハァー。なんで雨の日にこんな山のほうまでいかなあかんのやろう？」
小学四年生の遠足。テーマは「水について考える」だ。
「水の学習だけなら、小学校のインターネットで調べるだけで十分やと思うけどな。」
それでもバスは滋賀県・針江に向かって走り続けている。
バスが止まった。私達はカッパを着てバスを降りる。最初の目的地は民家。ここに何があるというのか。私達は十人ずつ家に入り中を見せてもらう。
「すごーい。」
順番を待っていると中から歓声が聞こえてきた。何？何があるんだ？私はワクワクした。ついに順番が回ってきた。ドキン。ドキン。胸が高鳴る。台所のようなところに案内された。そこには…
「えーっ。池？」
数メートル四方の穴に水が溜められている。少しだけ穴があいており、外の水路とつながっているようだ。
「ここでは湧水を壷池というこのような場所に流し入れています。」
「水の中に沈んでいるのは…？」
「あー。それは野菜よ。この中の水はキレイで夏でも冷たいからちょっとした物を冷やしたり料理や飲料用にも使えるの。」
「たくさんの使い道があるんだ。」
「ここではこのキレイな水を無駄にしないように工夫しているの。ここから溢れた水は端池というところにいくのよ。そこにも工夫があるからぜひ見てね。」
まだ雨はしとしと降っているが私はもう気にならなかった。端池の工夫って何だろう？早く見たいな。やがて端池が見えてきた。
「ここではコイやフナなどの淡水魚が飼われています。食べかすや使用済みのお皿や鍋を沈めておくと淡水魚が汚れを食べてくれます。それだけで食器がキレイになるから洗剤も使わないし、水は汚れません。ここでもう一度キレイになった水は琵琶湖に流れ込み、そして皆さんにも水が届くのです。」
「すごいなー。」
「水をキレイに使ってくれる針江の人がいてこそ京都の水があるんだ。感謝しないと。」
その時は、私もこのコイのように食べ物は残さないようにしようと漠然と思っていた。
そして今私は中学二年生になった。最近、学校で国際河川について勉強した。国際河川の上流にある国が汚濁原因物質を排出しており下流の国々に問題が起きているという。私は授業を聞きながらふと四年生の時の遠足を思い出していた。私達の住む京都の上流に位置する針江の人達などは水をキレイに使ってくれる。しかし、私達京都の人間に水が届けば終わりという訳ではない。私達の使った水はまたその下流、大阪などに流れる。つまりまだこの水のリレーは終わっていない。私達京都の人間も次に水を使う人にキレイな水を届けなければいけないのだ。もちろん下水は処理場でキレイになるが、それを当たり前だと思って良いのだろうか。このような取り組みは、一人一人の気持ちが大切だと思う。皿を洗う時、水で落ちにくい汚れはまず拭き取っているか。下水場を通らない川に汚物を捨てていないか。こうした小さな取り組みは集まると大きな力になる。国や市に頼るだけではいけない。こうした意識は世界の国際河川などの問題解決の糸口とも共通するところがあるのではないか。
針江のように水のリレーを成功させているところは世界中にまだまだあると思う。そういう場所を多くの人が知り、リレーの素晴らしさを学んでいくことが未来を担う私達に必要なことだと思う。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

祖父が教えてくれたこと

北海道　長沼町立長沼中学校　二年　池亀　廉

私の祖父は、仕事を定年退職し、羊蹄山のふもとの真狩村に自分の手で小さな家を建てた。自分が幼かった頃のように、不便だが静かな生活を楽しみたいという理由だった。その家は、森に囲まれた中に、ぽつんと一軒建っている。電気も水道も通っていない。祖父は、歯磨きも洗面も料理も食器洗いも、キャンプで使うコック付きの水タンクから水を出して使っている。でも、そのタンクの水は、車で十分ほどかけて羊蹄山の湧き水をくんでくるのだ。毎日、四リットルのボトルを十本ほどくんできて、それを様々な用途に使っている。

私は小さい頃から、祖父のその家によく遊びに行っていた。中学生になって行った夏の日のことだった。手洗いのとき、つい普段の癖が出て、水を出しっ放しにしてしまったのだ。祖父はこう言った。

「じいちゃんの水は貴重なんだぞ。そんな無駄な使い方をしたら、すぐなくなってしまうよ。」

祖父の家の水には、限りがあるのだ。祖父に言われて、初めて自分の水への意識の足りなさに気がついた。

改めて考えると、これまで私は、何も考えることなく自由に水を使っていた。確かに水の使いすぎで家族に注意されることもあったが、言われても直そうとはしなかった。水は、蛇口からいくらでも出てくるものだと思っていたからだ。手を石けんで洗っている間も、シャワーで頭を洗っている間も、水はずっと出しっ放しで、たくさんの水を無駄遣いしてきた。気になったので、普段使う水の量を調べてみた。すると、手洗い中、蛇口から出しっ放しの水は、一分で十二リットルにもなること、シャワーも三分で三十六リットルもの水が出ること、お風呂の湯船には大体百八十リットル、トイレの水を一回流すのに十三リットルも使うということがわかった。

祖父の家では、こんな水の使い方は当然できない。使いすぎると、あっという間に水はなくなってしまう。祖父は、生活するのに必要最低限の水を使うのだ。貴重な水だからこそ、祖父はその大切さを十分知っている。水がなくなれば大変なことになることも。だから、限りある水で、それに応じた生活を送っているのだ。それでも祖父は、遊びに来る私たちのために水洗トイレを作ってくれた。でも、トイレを使うたびに、くんできた貴重な水をトイレタンクへ相当足さなければならなかったのだ。水を無駄にしてきた私は、そこまでしてくれた祖父に申し訳ない気持ちになった。心から水を大切にしようと決意した。

「富士山の雪解け水は、二十年もかかって地上に湧き出てくるという話を聞いたことがあるよ。羊蹄山の水も、長い年月をかけて湧き水になってくるのだろうね。」

と祖父が教えてくれた。長い年月をかけてやっと私たちに届く水。その水は私たちの暮らしを支え、命をも育むものだ。決して無駄にしてはいけないものなのだ。

水は、貴重な贈り物である。祖父の、水を大切にする生活に触れたことで、今では、水を節約したり、流す水も汚さないよう気を遣うなど、率先して水を大切にしていけるようになった。水は、決して無限にあるものではない。現に水の確保に苦労し、そのために命をも脅かされている国もある。この日本も、遙か昔から、水を守るための果てしない努力により、今の豊かで恵まれた水があるのだ。そのことを忘れてはいけない。私たちは、もう一度水を大切にする生活に戻るべきなのだ。祖父の暮らしは、それを教えてくれた。

祖父は、最近、雨水を集めてトイレタンクに流す仕組みを作った。祖父らしい、水を大切にする工夫だ。私も祖父にならい、この自然からの贈り物である貴重な水に感謝し、水を大切にする生活を送っていきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

「生きる」につながる「水」

沖縄県　多良間村立多良間中学校　三年　山川　梨緒

どうやって人は生きていくのだろうか。自分の住んでいる多良間島の「水」について調べていくうちに、私はそんなことを考えるようになりました。島の人達が「水」を大切にしてきた生活の歴史は、「島で生きる」ことの尊さを私に教えているような気がします。

多良間島は、沖縄本島からさらに南にある宮古島と石垣島のほぼ中間に位置し、海の上にぽっかり浮かんでいるように見える小さな島です。

現在、島の生活に使われている水は、すべて地下水からなる簡易水道になっています。昔は「井戸」から汲み上げた水で生活していました。今も、通学路などを歩いていると、道のそばにコンクリートでふさがれている井戸があちらこちらで目に入ります。その井戸がいつ頃まで使われていたのかなど、私は今まで考えたこともありませんでした。しかし、その場所こそ、島の人達が生きるために必要とした「井戸」だったのです。

友達と一緒に多良間島の井戸について調べました。驚いたことに、自然井戸と人工井戸の二種類が存在していました。自然井戸は、人工的に掘ったものではなく、自然にできた湧き水のある洞窟のことです。自然の井戸の洞窟の中に入ると、牛や馬に水を飲ませるウマヌカーという泉や、男女別の水浴びする泉、飲料水の泉がありました。奥に入るとひんやりしていて、触れてみると冷たい湧き水でした。また、塩分の多い水といわれている自然井戸では、なめてみると本当にしょっぱい味がしました。

多良間島の井戸には、多くの伝説が残されていて、井戸と人々の生活が深いつながりを持っていたことが伝えられています。生活の変化と共に、さらに多くの水が必要になってきたので、島の人達は協力して人工の井戸を掘って使う暮らしへと変わっていきます。私の祖母は、「昔は遠くても水を汲みに一日に何回も井戸まで行き、運んできたんだよ」「大変だった」と話してくれます。今の私達の生活からは想像もつかないくらいに水を得るために苦労してきた頃の話です。その後、水道による給水が昭和四十六年に開始されました。その後も安心で安全な水道水を供給するため水道事業に多くの人が関わり、奮闘してきました。井戸の歴史を学ぶことで、「水」によって島の人達の生活が改善されてきたことが分かります。

多良間島は、「八月踊り」や「スツウプナカ」の行事が有名です。どちらも五穀豊穣の喜びと感謝を伝えるための行事です。「スツウプナカ」は、その年に畑で豊かに作物がとれたことに感謝し来年もまた、豊作になるようにと祈りを込めて行う行事です。「スツウプナカ」の際には、まず自然井戸に供物を捧げてから行事が始まります。井戸から祭りが始まるのも、井戸、そして水の恩恵に人々が感謝しているからだと思います。私達の祖先は、日常の暮らしの中で、水の大切さを知っていたから井戸へ感謝する行事が今でも引き継がれてきているのです。

今、毎日、何気なく使っている水ですが、多くの人々の苦労によって、このような生活が守られてきたのだと分かりました。「水」は、限りある資源であることにも改めて気づかされました。私達は「水」がないと生きていけない、だから、「水」がある生活を大切にし、節水を心がけていくことも必要なのです。洗面、歯磨きでは、流しっぱなしにしないことや、シャワーの水はこまめに止めるなど、できることを続けていきましょう。

山も川もない、小さな島には、みんなで助け合いながら「水」を大切にしてきた心が受け継がれています。島を受け継ぐ私達も「水」の大切さが、「生きる」につながっていると感じる心を未来へ残していきたいと思います。

水資源機構理事長賞（優秀賞）

水の大切さ

大阪府　四條畷学園中学校　二年　石谷　優翔

「水について」と言われたとき、真っ先にうかんできたのは、祖母の話だ。

僕の祖母は香川県高松市に住んでいる。高松に帰省すると、いろいろな所へ連れて行ってもらいましたが、記憶に強く残っているのが「満濃池」だ。これがため池！とびっくりした思い出がある。

日本一大きなため池で、まるで海のように大きかった。香川県は、日本で最もため池が多い県だとそのとき知った。日本でいちばん狭い県で、讃岐山脈から瀬戸内海に流れる川は短く降水量も少ないので、昔から水を確保するために、ため池に頼ってきたのだそうだ。その香川県では、これまでに何度も渇水に悩まされてきたという。

昭和四十八年の空梅雨による真夏の渇水は「高松砂漠」と言われて語り継がれている。

その様子はというと、あまりの水不足に県外に避難する人たちもいたほどらしい。水道は断たれて、一日に三時間しか給水がなく、食堂では食器を洗えないので、紙容器を使ったりトイレはくみ置きのバケツの水で流したりという生活が続いたそうだ。

そこで、四国でいちばん大きい河川、吉野川の水を香川県に引いてくる計画が推進され、早明浦ダムが建設され、香川用水によって送水されることになったのだと教えてもらった。

それ以降も何度か渇水がありテレビや新聞に早明浦ダムの貯水量〇〇パーセントと表示されているという。

僕の暮らす大阪府は？と思った。これまで渇水に悩まされた記憶は僕にはない。父にも確かめてみた。やはり、ないようである。

大阪は淀川という一級河川がある。水量も豊富で、それが大阪の給水源だ。インターネットや、本などで調べている時にテレビの特集で「琵琶湖の水とめたろか！」と滋賀県民が京都や大阪人に向かって捨て台詞を言い放ったのだということがあったと知った。なぜ、こんな台詞が、飛び出したのであろうか。汚す一方の人間に怒りを爆発させたのだろうか。

調べてみると僕たち大阪人の生活に欠かすことのできない水道の水源は琵琶湖でその水は滋賀県を含め、瀬田川、淀川を通じて京都府、大阪府、兵庫県でも利用され、水道水では近畿約一四〇〇万人が利用する貴重な水資源となって僕たちの生活や都市活動を支えてくれているのだ。どれだけの人間がこのことを感じているのだろう。

僕は、僕たちの使う「水」が琵琶湖に頼っていることがよく分かった。琵琶湖はとても貴重な水資源としてもその重要性が一層高まっていて、その豊かな水環境を保全しながら、水資源として将来にわたって有効な利用を図るという、「ワイズユース」が求められている。

そのため、滋賀県は琵琶湖の水環境を守るための市民による地域の環境保全活動などがさかんにいろいろと展開されているということも知った。その取り組みのなかに滋賀県内の全ての小学五年生が学習船「うみのこ」に乗船・航海し、宿泊をともなう教育を実施していて、琵琶湖の環境を主なテーマとして「びわ湖環境学習」を行っているということも知った。小さい時から「水」に対する意識が僕達とは違うのかもしれない。

僕は今回、水について調べたことで普段何も考えず、流しっぱなしにしている時があるので絶対にやめようと思う。

今の僕にできることは小さなことかもしれないけれど水の大切さに気づいたのだから、利用法や今後のことを少しでも考え努力しなければいけないと心の底から思いました。

全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞（優秀賞）

限りある資源、水

埼玉県　川越市立初雁中学校　二年　山口　夏果

私たちの生活に水はかかせないものである。私の一日の生活で考えてみる。まず朝起きたら、顔を洗う。そしてご飯を食べたら、お皿を洗い、歯をみがく。トイレにも入る。みんなの着た洋服を洗濯する。夜になると、風呂に入り、シャワーを浴びる。料理にも、私たちが普段食べている野菜や果物にも、水は必要不可欠である。当たりまえのように使っている水だが、今、考えてみると、本当にたくさんの水を、毎日使っているのだと実感する。

私が水の大切さについて考えるきっかけとなったのは、小学校三年生のときに行った、オーストラリアへの短期留学である。日本では風呂に入ることが普通だが、オーストラリアでは、風呂に入らず、シャワーを使うのが一般的である。そして、シャワーの使える量が決まっている。私もホームステイ先で

「夏果、シャワーは五分以内ですませてね。それを過ぎると、お金がかかるから、気をつけてね。」

と言われた。その時はあまり深く考えなかったが、調べてみると日本では考えられないことがわかった。

まず、オーストラリアでは、オーストラリア政府が「未来のための水資源（water for the future）」という取り組みを行っている。それは水に対する国家の十年計画で、ダムを作ったり、水のリサイクルをする拠点を作ったりする。オーストラリアは世界の中でも、十年間続いた干ばつ、気候変動など、水に関する特有の課題にさらされ、長年にわたり、水資源を管理するノウハウも培ってきたらしい。また、私が経験した風呂の水が制限されていたのもプロジェクトの一つで、制限を超えると本当に高額な罰金が発生するそうだ。そして、トイレの水も制限があるため、雨水タンクを利用している家もあるという。

オーストラリアでは、一人又一世帯の水の使用量が制限され、制限を超えると罰金が科せられる。しかし、日本はどうだろう。私の周りで見てみると、学校で歯みがきの時に、水を出しっぱなしにしていたり、水がポタポタとしっかり止められていない蛇口を見たりする。私のおばあちゃんも花の水やりの時に何分以内でまかないと、なんていっているのは聞いたことがない。また、母が洗車するときも制限なく水を使っている。

そこで、私は普段どのくらいの水を使っているのか、調べてみることにした。すると、一日に一人で約二〇〇リットルもの水を使っていることが分かった。二〇〇リットルと聞いてぱっとしないかもしれないが、スーパーで売っている二リットルのペットボトルにたとえると、一〇〇本も使っていることになる。私の家は五人家族だから、約千リットルもの水を使っていることになる。想像もできない数である。しかし、オーストラリアでは、一人一日あたり、一五〇リットル以上の水の使用は禁止されている。また、シャワーは一人四分までで、洗車するのにホースは禁止されている。そして、今オーストラリアは、水資源改革と管理における世界的なリーダーとして急速に認識されつつある。

水は限りある資源である。だから、私は普段からオーストラリアのように、水の使用を制限するべきだと思う。水を節水する意識に対して、もし不平・不満を言う人がいるのなら、それは地球に住んでいる人として「わがまま」なのかもしれない。

私も、これを機に、手を洗うとき、歯をみがくとき、食器を洗ったり風呂に入るとき、いつもより意識して節水していこうと思っている。日頃から心がけていれば、どこに行っても不便を感じることはないだろう。そして、なにより「水」を分かち合う感覚というものをいつどこにいても意識できる人でありたいと思った。

入選

未来への贈り物

北海道　長沼町立長沼中学校　三年　倉田　友美

私が住む長沼町は、のどかな田園風景が広がる緑豊かな町だ。

「おはようございます。」私は笑顔になった。

「おはよう。いってらっしゃい。」近所のおばさんも笑った。道を行けば笑顔の花が咲く。私は、この町が大好きだった。

小学生のときのことだった。社会の授業で「長沼の水」について学んだ。最初は、「たかが水でしょ。」と思い、何の興味も示さずに授業を受けていた。けれど、授業を聞いているうちに、その出来事の重大さに衝撃を受けた。

それは、長沼の水との戦いだった。長沼では、過去に七十回以上もの水害があった。その原因は、長沼が夕張川と千歳川に挟まれていて、土地が低いことに関係していた。

川の氾濫、床上浸水、水没、住宅半壊。大水害が、もたらした被害は大きかった。

毎年のように起こる水害によって、作物は傷めつけられ、家などが流された。ついには、人の命までもが危険にさらされ、町一面が沼のようになった。

けれども、人々は、いつ静まるかも分からない水害に必死になって立ち向かった。長沼の緑、そして、たくさんの笑顔を取り戻そうと。

なぜ、そこまでして水と戦ったのだろう。川は、町を囲むように流れている。遙か昔から水は人々の生活の中心となっていたのだ。

また、農業が盛んな長沼では、水が最も大事な資源だった。

そのため、先人たちは水と戦い、水を守ってきた。度重なる水害に、くじけそうになった時もあったはずだ。そんな不安な状況の中でも人々は、お互いを支え合い、励まし合ってきたのだ。

その後、苦労を重ねて堤防を作り、排水の施設を作ることで、長く続いた水との戦いは幕を降ろした。

長沼では、水を自由に使えるようになった今も、治水のための取り組みが続いている。

「先人たちが守り、育んできた水。」

しかし、今の私達は、そんな先人たちの苦労や想いを忘れている。

川沿いを歩けば、ペットボトルやスチール缶、お菓子のごみが落ちている。そればかりではない。水を当たり前のように使えるものだと思い込んで無駄遣いをしている。

水の恩恵を見失ってはいないだろうか。

先人たちの努力のおかげで、水害がなくなり、水も自由に使えるようになったはずだ。先人たちがこんな現実を望んでいたわけがない。だから、先人たちが苦労して守った水の価値を私達が見失ってはいけない。

私は、授業によって水の大切さを知り、考えることができた。中学生になった今では、水を出しっぱなしにしないよう心がけている。

遙か昔は何も無かった
原野を切り開いた先人の贈り物

これは、長沼中学校の校歌の一節だ。

「笑顔あふれる長沼町」。先人たちが築き上げてきたこの町を、私は誇りに思う。

そして、授業を通して私が感じたこと。それは、水とは「先人の贈り物」だということ。先人たちが必死になって守った水を今を生きる私達が守り、未来に届けていかなければならない。

そのためには、節水をする、油を流さない、水を出しっぱなしにしない。どんな些細なことでもいい。自分にできることを探してみよう。それが、未来への贈り物になるから。

入選

かけがえのない水

青森県　むつ市立むつ中学校　一年　井上　凜士

私たちが日ごろから当たり前のように使っている水は日常生活を送るのにかかせないものです。もし水が使えなくなったり、汚い水しか使えなくなったら私たちの生活はどうなるでしょうか。

平成二十八年四月十四日に熊本県で震度七の大きな地震が起こりました。この地震で多くの建物が倒れたり壊れたりしました。

ニュースでは電気やガスが止まったり、多くの家庭で水が止まるなどの被害があったと伝えていました。水が止まったため水を飲むことができなくなったり、お風呂に入ることができなくなったり、料理を作ることができない状態が五月の大型連休を迎えた今なお続いているそうです。そのため自衛隊や消防などが給水活動を行っています。

飲み水を確保するためにバケツに入れて持ち帰る人の姿がニュースで放送されていました。また、お風呂に入れない人のために自衛隊が入浴施設をつくっている様子も報じられていました。料理を作れない人には、たき出しなどのボランティア活動が行われていることを新聞で知りました。

私は、水がないとふだんの生活がなりたたないということをこのニュースで改めて考えさせられました。水を飲むことができないということは人間の命に直接関わることです。単に水道の蛇口から水が出ればいいというわけでもありません。その水がきれいであることが大切な条件になります。

水に関していえば私には一つ思い出があります。それは五年前に起きた東日本大震災のことです。当時、私たち家族は父の仕事の都合で震災直後に千葉に引っ越ししていました。そこで一番困ったことは水道水のことでした。

東日本大震災では福島県で原子力発電所の事故があって、周辺の山や川が汚染されているとうわさされていました。利根川もその一つで、私たちが住んでいたアパートは水道水にその利根川の水が使われていたため使うことを自粛しました。水道の蛇口からはたしかに水が出ましたが、その水を使っていいのかわからず、飲み水にはスーパーで苦労して買って手に入れたペットボトル入りのミネラルウォーターを使っていました。料理にもその水を使っていました。

一番困ったのは、その当時、まだ小さかった妹のミルクをどうやって作るかでした。近所のスーパーやコンビニエンスストアでは水はいつも足りないか、売り切れていました。そのために親せきや祖父母からペットボトル入りの水を送ってもらうことになりました。幸い、利根川の水は汚染されていないことがのちにわかりましたが、ふだんの水道から出る水がきれいだということがどれほど大切かということを実感しました。

私は小学生のときに水道局に社会見学に行ったことがあります。そこでは、きれいな水を家庭に送るために働いている人たちがいました。そこには水をきれいにするためにたくさんの設備があって、毎日たくさんの水を送り出しています。水の品質は厳しく管理されていて、これを維持するのはとても大変なことだと感じました。千葉でもそうでしたが、日本中の水道局やそこで働くたくさんの人たちの努力があってこそ、はじめてきれいな水が保たれているということを知りました。

私たちがふだんの生活で当たり前のように使っている水。これがなくなったら健康な生活が送れないばかりか、生きていくこともできません。水はただ流れてくればよいというものではなく、きれいでなければ意味のないものです。このかけがえのない水を毎日守ってくれている人たちに感謝して私もまた水を大切にしていきたいと思います。

入選

水との関わり

岩手県　花巻市立東和中学校　一年　菅原　颯

この時期、わが家は蛙の大合唱に包まれる。水田に水が入ったことを喜ぶ声。それは、僕達が忘れがちな、命をつないでいくために水がどれだけ必要であるかを思い出させてくれる声だ。夏にはセミの声、晴れ渡る空に輝く虹。秋には空を飛ぶトンボや色づく木々。冬にはしんしんと降り積もる雪の中で、春の光を待ちわびる新芽や新しい命が静かに、けれど大地にしっかり踏ん張って生きている。どれも水や太陽、澄んだ空気がなければ見られない風景だ。こんなに四季の移ろいを感じられる中で暮らしているのに、生活の利便性だけに心がとらわれ、そもそも水がどこからもたらされているのかも忘れ、自分勝手な行動をとる人が多いことがとても悲しい。

先日、僕はクリーン作戦に参加した。ゴミ拾いや水路の清掃をするものだ。ある一か所から、おそらく一ケース分はありそうな同じ種類のペットボトルや空き缶が見つかり、怒りで声も出ず、無言で拾い集めた。それは道路わきの林の中。すぐそばには水路があり、「自然を守ろう。ゴミ捨て厳禁」の立て看板もある場所だ。水路の水はにごり、とても悲しい気持ちでその水を見つめていた。

思い出すのは、五年前の大震災。僕の暮らす町では、電気以外のガスと水道はいつも通りに使うことができた。でもそれは、当たり前のことではなかった。普段の生活を守るために悲しみの中でも一生懸命働いてライフラインを守ってくれた多くの人が居たことを知った。水道が止まってしまった多くの市町村では、わずかな水も分け合い、給水車に並び、湧水や貯水池の水を生活用水にするためにバケツリレーで運んでいた僕達と同じ年の小中学生が居たことも知った。

「特別な事じゃない。するべき事は何かを考え、それをやっただけだよ。」

小学校の時交流活動をしていた釜石の唐丹小学校の皆さんが、しっかり前を向いて話したこの言葉が忘れられないし、忘れてはいけないと思っている。

これまでにも全国各地で地震だけでなく、大雨や水害といった自然災害が次々起こっているのは、正に地球からのＳＯＳ、人間への警鐘と捉えるべきではないだろうか。そもそも人間の身勝手な生活によって水が枯れ、無くなったらどうなるだろう。まず生きていけない。水は飲み水であるばかりでなく、食としていただく命全ての源になっている。生活用水がなければ衛生的に暮らしていくこともできない。更には自分たちだけではなく、自然界の食物連鎖の崩壊も引き起こし、生物を絶滅させてしまうことにもつながっていくだろう。そんなことは分かっていると多くの人が言うだろう。でもその中ですべき事に気づき、実際に取り組んでいる人は何人居るだろうか。

昔は道路にまであふれるほど水量豊富だった湧水が、今では半分位の水量になってしまった場所が、隣の地区にある。僕はこの湧水にも助けられていた。幼き頃両足に赤い湿疹ができていた。風呂用の水をここの湧水に変えたらきっと治ると両親を始め、祖父母、曾祖父母が湧水を汲みに行ってくれたことを覚えている。今では、身体も大きくなり湿疹も出ないだけでなく、ほとんど病院に通院する事もない。ただ、小学校卒業までお世話になったスクールバスの窓から思い出の湧水の量がだんだん減っていくのを見るのはさびしく、何があったのだろうと思っていた。

水に思い出がある人、無い人。限りある資源の水を守るためにやるべきことも人それぞれだろう。小さな気づきを大切にし、お互いの取り組みを認め合い、すべきことを当たり前にし、やってはいけないことは、絶対にやらない人間になっていきたい。暗い気持ちの中で飲んだ一杯の水に明日も頑張ってみようかなと勇気づけられた思い出を忘れずに。

入選

「水」への感謝

宮城県　石巻市立河南西中学校　三年　土田　琴未

あの東日本大震災から約五年。被災地の復興は徐々に進み、現在私は、家族と、以前と変わらない日々を送ることができている。

その一方で五年という年月が経った今、仮設住宅の限られた空間で生活している人々や、原発事故により、今まで生活していた故郷に戻ることができない人々がいることも事実である。

あの日、私も当たり前のことができず、当たり前の物が使えずにいた。使えなかった物の中の一つに、「水」がある。今、普通の生活を送れているからこそ、「水」に対する気持ちを自分自身、忘れているのではないだろうか。

三月十一日、私が小学三年生だった頃。学校で突然感じた大きな揺れ。一瞬、目の前で映像が途絶えたかのように何か恐ろしい物を感じた。何が起きているのか整理がついていない当時の私にも、それはすぐに分かった。あの恐怖は、今でも心の奥に残っている。校庭に避難し、家族を待ち続けた時間は、無事なのだろうか、地域、自分達の家は・・・という不安との戦いだった。それと同時に、地割れが起きている校庭。大変なことが起こったんだと改めて事の重大さを知り、言葉も失っていた。その時、家族が私を迎えに来てくれた。不安で胸を覆っていた糸が解けていくようだった。

車に乗り込み家に帰る途中、目を疑った。電柱や電線が道路を塞いでいる。家に帰っても、水槽は倒れ、床は水浸しで、物が散乱していた。そして、母が急いで台所に行く。水が出ない。これからどうやって生活していくのだろうと先が見えなかった。その反面、当時私は、明日、明後日もすれば回復するという軽い気持ちでしか考えていなかった。

その翌日、「水をくみにいくぞ。」と父が言った。

「水をくみに行くって、どこに?」私は思わず言葉を返した。

言われるままに車に乗った。父が車を運転していくと、少しずつ何か見えてきた。

沢だ。光で輝いている。

「こんな所に沢があったなんて。」

一日ぶりに水を見た。その時だけ、震災前のあの何事もない日常に戻れた気がした。家族の顔にも笑みがこぼれる。

家に帰ると、近所の家の方から井戸水を分けて頂いた。私は誰かのために、誰かの役に立つことをするということは考えられなかった。

しかし、近所の家の方は、「苦しいときはお互い様だから。」と、親切に接してくださり、私達は感謝の気持ちでいっぱいだった。

水が使えなかった約二週間、軽い気持ちで考えていた私にとって、もちろん長く大変な毎日だった。それでも、自然の中の沢で感じた喜び。苦しい時に水を分けて頂いた人々。今、改めて振り返り、忘れかけていた「水」への「喜び」、「水」が使えることへの「感謝」という気持ちを、もう一度、強く感じることができた。

それでは、今の自分に何が必要とされるのだろうか。

自然災害の大地震から引き起こされた大津波。それによって多くの尊い命や日常生活も失った。私はあのような災害が起き、その自然の力の残酷さを憎んだ。自然には「海」、もっと広げれば「水」がある。素直に「水」は恐ろしい物だと思う。

しかし、もう一方で災害の時に「水」への感謝、大切さを感じた。

私は、「水」とは永遠に切っても切り放せない存在であるのだと思う。津波で失われた物は大きいが、「水」の力という物は、私達に欠かすことのできない存在であることも災害によって気づかされた。

「水」について、もっと理解すると共に、今使えていることに「感謝」という気持ちを常に噛みしめていく。そして、水の無駄使いを無くしていき、これからも、日々大切に使っていきたい。

入選

魔法の液体～一枚の写真を通して～

福島県　泉崎村立泉崎中学校　三年　鈴木　梨沙

「水」と聞いて私が脳裏に思い浮かべるのは透き通った美しく安全な水である。蛇口をひねったらいつでも水を入手できる。ある一枚の写真を見るまではそう思っていた。

「水道水をそのまま何のためらいもなく飲める国はそう多くありません。」テレビであまり聞いたことのない分野の専門家がそんな事を口にしていた。日本の水は安全ということは聞いたことがあった。水不足に苦しむ人々のために井戸をほるなどの援助をするボランティア団体も聞いたことがあった。しかし、そのような団体と直接的な関わりをすることがないため当時詳しい情報は分からなかった。

このニュースをきっかけに世界の水不足について興味が湧き、インターネットを通して調べてみることにした。今まで調べたことがないテーマだったため私にとっては難しいワードばかりが並んでいた。言葉についての知識が乏しい私は意味を理解することが出来ず、画像を見て学ぶことにした。あるサイトをクリックし一枚の写真を目にした途端、今まで味わったことのないような衝撃に全身が包まれた。なんともいえない感覚だったということを今でも鮮明に覚えている。そこに載せられていた一枚の写真。そこには頭に大きなバケツを乗せ、列を作って歩く姿が捉えられていた。そして画像の下には「水を得るために毎日数十キロメートル歩く子供たち。世界では一日あたり四千人の子供が水質汚染や水不足が原因で命を落としています。」という文章が添えられていた。毎日四千人。私には信じ難い、というより信じたくない数値だった。バケツの中には飲み水とは思えないほど濁った溢れんばかりの水が入っていた。きっと写真の中の子供たちにとっては水と死は隣り合わせで少しの天候の変化も死と直結してしまうのだろう。明日を生きるか死ぬかなんて考えず、自分の感情を優先して行動してしまう自分が情けなく、とても不甲斐なく感じた。写真の中の子供たちにやりたい、やりたくないという感情はないだろうと思う。水を運べば生きられる可能性がある。そうでなければ確実に死んでしまう。だから生きられる少しの可能性を信じて水を運ばなければならない。水を得るためだけにこんなにもたくさんの努力をしているのだ。蛇口をひねれば自分が望む分だけ水を入手できる日本からは想像がつきにくいがこれは確かに紛れもない事実なのである。

私はこの一枚の写真を通して水の貴重さに改めて気づくことができた。そしてこれを境に水に対する思いが変わった。

今、世界が抱えている大きな問題。その問題のほとんどの原因は人間が編みだしてしまったものだと思う。水質汚染も地球温暖化も自然破壊もすべて。有限な資源を、後先考えずに使い込んだ結果が今の発展途上国の環境を創り出したのだろう。今、そのような環境で生きる人々が苦しんでいるのは、私たちやその祖先が無駄に資源を使用していたからなのかもしれない。だから私たちはその現状を知り、受けとめて、多くの人に伝え、私たちにできることを継続して実践する必要がある。これは、ただなんとなくという漫然とした理由ではなく「水で苦しむ人を救うため、何十年、何百年後の地球を守るため。」である。そのために「まずは自分から」という意志を持ち続け、努力していきたい。

「水」と聞いて私が最初に思い浮かべるのは子供たちが懸命に水を運ぶ姿。明日を生きるために努力する姿。これは決して良いことではない。いつか私が「水とは何か。」と聞かれたら、「世界中の人々が笑顔で飲むことができる魔法の液体。」と答えられるようになりたい。いつかそんな日を迎えることができるよう、生きていられるということに感謝をし、水不足について正面から向き合っていきたい。

入選

水に学ぶ

福島県　白河市立白河南中学校　三年　関根　佑治

私の欠点はガラスの心である。私は小さい頃から気持ちがとても弱かった。ちょっと怒られただけですぐに泣いてしまったり、友達の輪になかなか入れなかったり・・・。そんな自分が大嫌いだった五年前に日常生活をうばった、あの大震災があった。水道管が壊れ、数日間不便な生活を強いられた。水が飲めない。手も顔も、食器も服も洗えない。風呂にも入れず、トイレの水も流せない。水は生きる上で不可欠だ。

私たちにとって最も大切な水。この「水」と近年騒がれている「温暖化」は密接な関係があり、温暖化が進むと世界の水不足が深刻化すると聞いた。そこで、昨年の夏休み、理科の自由研究で、温暖化の主な原因と言われている二酸化炭素の研究をした。私の環境活動が、そこからスタートした。

冬休み、日本の環境首都水俣へ行く機会があった。「もう、帰りたいな。」が初日の感想である。いつもの、気持ちの弱い自分がそこにいた。しかし、参加目的の一つはそんな自分を克服することだ。「もっと気持ちを強く持ち、積極的にいこう。」と切り替えた。

水俣との交流事業ではたくさんのことを学んだ。一度環境を破壊すると元に戻すのは困難だということ。台所排水が最も水を汚染しているということ。水俣の海はきらきらと美しく、海風も優しく私たちを迎えてくれた。だが、コンクリートの下には今も水銀が・・・。一見すっかり回復したように見えるが、人々の努力はまだまだ続いている。事前学習からも色々なことを学んだ。例えば、寛政の改革を主導した松平定信は白河藩主だったが、水環境の重要性を唱え、白河に日本最古の人造湖である南湖公園を造った。また、日本三大疎水の一つ安積疎水は、福島の中央にある郡山とその周辺に農業用水・工業用水・飲用水を供給していることも知った。

次に私は、生物多様性研修で屋久島へ行った。その降水量は東京の六倍で、自然エネルギー分野における先進地域である。この研修でも多くのことを学んだ。私が思う生物多様性は「つながり」である。人間・動物・植物の一つ一つの行動がつながっている。心の中に生物多様性があるのかも・・・。思いの一つ一つが生み出すのかも・・・。歯車のようで、一つが狂うとすべてが狂ってしまう。

澄み渡る青い空と青い海、恵み豊かな黒い大地と大空に浮かぶ白い雲、そして、光輝く緑の風景。これらすべての源泉は水である。白河市内の泉には国内で唯一そこにしか自生していない、かやつり草科ビャッコイ属の多年草がひっそりと生息している。県指定の天然記念物だ。豊かな自然を守るために私ができること。それは色々なことに興味を持つことだ。自分の目、耳、肌で直接感じ、考え、行動に移していきたい。

先日、環境ボランティア体験の事前準備として、ボランティア養成研修を受講した。秋には猪苗代湖でのクリーン活動に参加する。国内で四番目に広いこの猪苗代湖は、最近の研究結果で約五万年前にできたということがわかった。安積疎水も、この猪苗代湖から水を引いている。

水と共に歩み、様々な体験をし、多くのことを学んだ。もし、水に興味を持たなかったら、知らないままだったことも多いだろう。今後も、水の学習を通し積極性を養い、自分自身をさらに磨いていきたい。現在、生徒会長である私は折れない心をモットーとして、よりよい学校作りにも燃えている。

命の源、すべての源、私の成長の源、水。「皆さんは自分のことが好きですか。」私は水に学び、変わった。今、言える。自分のことが大好きだと。いつか、水環境という視点から海外研修にも行ってみたい。水に叫ぼう。「ありがとう、これからもよろしく！」

入選

源流から水を想う

茨城県　茨城県立古河中等教育学校　三年　茂呂　碧斗

皆さんは川の源流を見たことがありますか？源流とは川の源で、水が湧き出している所です。僕は、西の富士、東の筑波と称されるほど古くから親しまれている筑波山へよく足を運びます。つい先日も春休みを利用して部活の仲間と登ってきました。登山道の途中に「筑波嶺の峰より落つる男女川　恋ぞつもりて淵となりぬる」と百人一首で詠まれている男女川を渡ります。僕はそこでの小休憩が好きです。源流に近いため、流れは細く、手で水をすくうのがやっとですが、登るたびに聴こえてくるせせらぎの音や、流れている水の量が違うなと感じます。雨の日が続いていたり、雪や霜で山全体が水を吸っていたりしているときは、源流近くでも流れがいつもより激しくなるのだと思います。手ですくった水で汗ばんだ顔を拭き、少し口に含んでみると、味こそ分かりませんが、冷たい水が口に広がり、「筑波山の地中で自然浄化された水だな」と思うのです。そして、そこから男女川の源流を目指して再び登り始めます。

男女川の源流は標高八百メートルの御幸ヶ原近くにあり、近づくにつれ、ひんやりとした空気とさらさらという何とも言えない音に包まれます。直径三十センチくらいの岩と岩の間から湧き出ているように流れているこの水こそが、男女川の源流なのです。岩肌をなでるように優しく流れている水ですが、大雨のあとはドクドクと音を立てて湧き出し、登山中も絶えず水の流れる音が聴こえ、驚いたことがあります。その源流の傍らには、樹齢八百年の杉の巨木がそびえ立ち、苔むした太い幹を見ると、八百年もの間この地で源流を吸って脈々と生きているのだなと、力強い生命力と自然の力を感じることができるので、僕は必ず登山途中で、ここに寄ります。男女川の水の味こそ分からないと書きましたが、水源の地層によって水の味は変わるそうです。各地の源流を飲み比べてみたら味の違いが分かるのかもしれません。

さて、男女川は源流から筑波山の麓を流れ桜川に合流し、霞ヶ浦に流れ込みます。そして日射により温められて蒸発し、大気中を昇った水蒸気が冷えて水滴となり雲を作り、雨、雪となり、大地に降って再び源流となるのです。どこが始まりかと言われたら、生命を生み出した海からでしょう。「海から雲が生まれ、雲から雨が降る。雨から川が生まれて、川から海が生まれる。」大切に僕たちが守っていかなければいけない地球の自然の循環です。

源流が川となり、原水は取水場から取り入れられ、浄水場へ。浄水場でろ過された水が水道水として各家庭へ。蛇口をひねればきれいな水が当たり前のように流れてきますが、実は水の供給は大変なことなのです。そのきれいな水は、台所で食器を洗ったり、洗濯で使ったり、生活排水として排水口から流れ出ます。が、汚れた水がそのまま川に流れ込むと川も汚れ海も汚れ、地球全体の水が汚れていきます。水が汚れると人は生きていけません。安全で美味しい水が飲みたければ、自分たちが水を使うとき「また、この水が戻ってくるんだ」と排水に注意をはらい、水は地球をぐるぐると巡っていることを意識することが大切だと思うのです。下水処理された水が海へ流れ、雲となり、雨となり、源流の地へ戻っていきます。

僕はこれからも筑波山に何度も登り、男女川に近づくと聴こえてくるせせらぎの音や、手ですくったときの水温などで季節を感じいやされると思います。「水」が蓄えられている森林を守り、きれいな水が湧き出ている水源の自然の働きに感謝しながら、地球を巡っている水と「おかえり」、「いってらっしゃい」と対話し、「水」という資源を大切に想いながら生活していこうと思います。

入選

水資源を守る

茨城県　筑西市立下館中学校　二年　粟野　遥貴

昨年の九月に関東・東北豪雨が発生した。これまでの台風なら、一晩過ぎれば次の日は晴天という場合が多かった。今回も同じだろうと軽く考えていたが、降り続く雨の勢いがすごくて、このままでは大変なことが起きるのではないかと不安を感じた。

翌日のテレビニュースは、急速な増水により氾濫した鬼怒川が、周りの家を丸ごと飲み込んでいく様子を繰り返し報じていた。今回の豪雨で、私の祖父母が住む栃木県小山市を流れる思川も氾濫し、一時避難する騒ぎとなった。幸いにも無事で済んだが、親戚の家では床上浸水になって、家財が水浸しになってしまったそうだ。

日常生活において、水はかかせないものである。地震による断水で、水がないとこんなに不便で困るのだと認識させられた経験があるが、水が多すぎて、これほど大きな被害が発生するというのはこれまで経験したことのないものだった。水について改めて調べてみた。

人間の身体は約六十パーセントが水分でできており、毎日一定の水分を補給しないと生きていけない。また、トイレやお風呂、洗濯調理といった生活活動では、飲み水の何倍もの水が必要となる。風邪やインフルエンザといった病気の流行を防ぐために、よく言われることは、手洗い・うがいをしっかりすることだ。水で菌を洗い流すことが、一番効果があるからだ。そうした衛生面でも水は必要不可欠だ。

このように水は大切なものであるが、普段はそのありがたみを感じていないというのが実感ではないだろうか。日本の年間平均降水量は、世界平均の約二倍だそうだ。蛇口をひねりさえすれば、公園などの外出先であっても、きれいで安全な水が容易に手に入る。山間部などそのまま飲用できる湧水が手に入る場所もある。

一方、世界に目を向けると、発展途上国を中心に安心して飲める水が手に入らない国も多い。こうした国々では、水資源を確保するために自然が破壊され、生態系が壊れるという問題まで引き起こされているという。

日本で生まれた私たちは豊かさに慣れ、この安全で安心な水の供給を、当たり前としか感じなくなっている。世界に目を向けることで、現在の生活環境の全てが、いかに快適でありがたいものであるのか、改めて理解することができた。

今までは「水を大切に」という思いは、自然保護というエコロジー的な考えに基づく漠然としたものだった。

「水のありがたさ」を強く意識せずに生きてこられたのは幸せだったのだ。飲み水から生活用水まで、水がなければ人間は生きていけない。そして、安全な水を将来にわたって確保し続けていかなければならないということも分かった。水は貴重な資源であることを強く意識しなければならないと思う。

中学生の私にできることは何だろう。水の大切さを強く意識し、これまで以上に節水に取り組んでいきたい。一人ひとりの節水への取り組みが、自然の恵みである貴重な水を守ることになるのだ。

また、節水により単に使う水の量を減らすだけでなく、積極的に水資源を守る努力も必要だ。水質汚染を避けるために、海や川にゴミを捨てないことは勿論のこと、生活排水による汚れを極力抑えるため、食事の最後に食器の残り汚れを拭き取るなど、洗い流す前のひと工夫を徹底したい。

これからの将来を見据え、自分の行動に責任を持って、水を大切にする心、資源を大切にする心を持ち続けていかなければならないと思う。

入選

未来の水を守るために

栃木県　茂木町立中川中学校　二年　　糸井　あゆか

「一〇〇年後の水を守る。」これは、図書室の新刊コーナーにあった本のタイトルです。題名に興味をもち、借りて読んでみると、中国やインド、シリアなど、今まで知らなかった他国の水事情を知ることができました。

私が一番驚いたのは、バングラディシュの水問題です。なぜなら、ヒ素を含んだ水だと知りながら、その水を飲んでいる人たちがいたからです。著者の橋本さんが訪ねたのは、一九九〇年代でした。今はどうなのかを調べてみました。すると「現在もヒ素に汚染された水を飲んでいる人たちがいる。」という事実を知り、衝撃を受けました。私たちは、安心して水道水を飲むことができます。それなのに、もっとおいしい水を飲みたいと思えば、ミネラルウォーターを買って飲むことだってできます。私はとても恵まれた環境にいることを実感しました。その一方で、日本も例外ではなく、水は有限の資源であると改めて感じました。例えば、日本でも、夏に水不足が生じると、節水をする必要があります。災害が起きた場合は、必ず水不足が問題になっています。このように、「水」は私たちの生活には必要不可欠で、命にかかわってくる貴重な資源です。

この本から学んだことは、水を守るためには、周りの自然環境を守っていくことが大切だということです。また、二〇一四年には、水の憲法である「水循環基本法」が成立したことも知りました。

私は、自分が住んでいる地域の自然が守られているのか、考えてみようと思いました。

私の住む地域には栃木県で二番目に長い那珂川が流れています。那珂川は「日本の原風景」と言われ、多様な生き物が生息しています。まさに「清流」にふさわしい川です。私と弟は、小さい頃から父に連れられて、那珂川に釣りに行っています。だから、私にとって那珂川はとても大切なふるさとの川です。

私が通っている学校では毎年、那珂川の河川敷清掃活動を行っています。私は昨年初めて参加しましたが、空き缶やタバコの吸い殻、ビニールなど、様々な種類のゴミが落ちていました。中でも驚いたのは、絶対にあるはずのないベビーカーが捨ててあったことでした。なぜ川にゴミを捨ててしまうのかと、私は怒りが込み上げてきました。

私たちは、川の水を飲料水として使っています。川を汚すことは、自分たちが飲む水を汚すことにつながっているのです。川の水がちょっとでも汚れると、きれいな水道水にするために、多額な費用や手間がかかってしまいます。そのうえ、カルキ臭のおいしくない水を飲まなければならなくなってしまうのです。また、農作物の栽培や生息する生き物にも与える影響が大きいです。河川が汚染されると、きれいな川に住むアユやヤマメといった魚はもちろんのこと、汚れに強いコイも住むのが難しいと言われています。

今年になってから新聞で「那珂川のアユやカジカの減少が目立ち、以前に比べ釣り人が減っている。」という記事を目にしました。その原因は、生活排水の流入や川の水量の減少が挙げられるそうです。

私は生活排水の流入が河川を汚す大きな原因だと知って、自分も川を汚してきた一人だということに気付きました。自分の生活を振り返ってみると、反省することがたくさんありました。これからは、水を守るためにすぐにできることを実践していこうと思っています。一つ目は、歯磨きや洗顔は水を出しっぱなしにしないこと、二つ目は、シャワーの時間を短くすること、三つ目は、食器の洗浄は汚れをふいてから洗うこと、四つ目は、雨水の再利用をすることです。

いつまでも、ふるさとの豊かな自然と那珂川の水を守っていきたいです。

入選

水の未来と過去の知恵

群馬県　群馬大学教育学部附属中学校　二年　髙井　智大

木漏れ日の中、涼しげな音をたてながら流れる水を目で追った。やがてその水は、四角い枡のような所に導かれ、中央に置かれた三角柱にぶつかる。静かに左右、そして前方へと三方向に分かれて、また木々の中へと流れ下って行った。

この光景を目にしたのは、昨年の夏。山梨県の八ヶ岳南麗高原湧水群の一つ、「三分一湧水」を訪れた時のことだ。日本名水百選に選ばれた冷たくておいしい水が、一日に八五〇〇トンも湧き出すそうだ。子供の水遊び場のようにも見える場所だが、武田信玄によって考え出されたという言い伝えが残っていた。

農業用水として利用する川の水を巡って、下流の三つの村が争った際、水を三等分することができる「三分一湧水」を作って解決したのだという。蛇口から欲しい分だけ水を使うことに慣れている私達とは違って、水を得ることに必死だった時代の人々の知恵に、驚かされた。

また、加藤清正も優れた治水技術で現在の熊本県を治めていたといわれている。阿蘇の湧水を水源とする白川の水を農業用水として用いる時に、鼻ぐり井手という水路を考え出したそうだ。牛の鼻輪のようなトンネル状の穴を開けた立て板で流れを遮る構造により、水中に渦を作って水に含まれる火山灰が水路に沈殿しない工夫をしていた。流れが滞らないので効率よく下流域まで水が届き、農業生産率を飛躍的に高めることに成功したらしい。水を得るだけでなく、利用する際の知恵にも感心した。

武田信玄と加藤清正。共通するのは、農業用水における工夫だけではなかったことも知った。彼らにとって、水は生活を豊かにするものである一方、時に命を脅かす危険なものでもあった。川がもたらす災害は、今より身近だったはずだ。だから、武田信玄は川の合流地点を変えて、浸食を避け、洪水を防ぎつつ、さらに運ばれてくる肥沃な土を得ることの出来る信玄堤を築いた。加藤清正も蛇行する川を直線化して氾濫を防ぎ、城の外堀としての働きを兼ねさせ、水運にも役立てた。

水をコントロールして最大限に有効活用する都市では、農業や工業が発展し、人々が安心して豊かな生活を送れただろう。昔の人は、その豊かさを感じる時、同時に水の恩恵にも目を向けていたように思う。湧水を分け合い、用水路に工夫を施し、作物を育てた田畑の水が地下に浸み込んでいく循環を意識していたに違いない。生活に欠かせない井戸水や川の水の変化も、日々味や臭いで察知できていたはずだ。水への恐れと感謝の気持ちが、水を賢く使わせたのではないだろうか。今の私達はどうだろうか。蛇口から排水口に吸い込まれる水や、傘に当たった雨が側溝に流れ落ちる様子は無表情に見える。日常使う水は、いつも清潔な臭いだ。時々、水害のニュース知り、水の底知れないパワーに恐怖を覚えては、忘れていくのだ…。

そんな私達だが、また昔の人のように、改めて水について深く考えなければならない時期を迎える予感がする。宇宙空間での生活が、少しずつ現実味を帯びてきたからだ。地球に生まれた人間をはじめとする多くの生き物にとって生命を維持するために水は必須である。水という資源が限られている宇宙で、人間が活動の場を広げるためには、様々な工夫が必要だろう。宇宙ステーションで行われている尿からの飲料水再生は、水の循環を強く意識させられた。武田信玄や加藤清正が、数百年前の知識と技術で成し遂げた偉業を思うと、私達も水という資源に真剣に向き合わなくてはいけない。彼らと同じように、水への恐れと感謝の気持ちを忘れず、水がもたらす無限の可能性を信じて…。

入選

大切な水を守るために

神奈川県　サレジオ学院中学校　三年　山本　雄介

祖父母が住む熊本は、とても水がおいしいです。この水は地下水だそうです。熊本は地下水が豊富でとてもおいしいのです。地下水は地上に降った雨水が次第に地下に染みこんでいくうちに、汚れがこされてきれいになり、地中の炭酸ガスや岩石のミネラルが溶け込みおいしい水になるのです。この地下水がたまる「地下水プール」は阿蘇山の噴火による堆積物により非常に水を造りやすく、蓄えやすい地層となっているのです。しかし、近年、雨がしみこむ土地が減っている、水をたくさん使っているなどの理由で地下水は減っています。

私が住む神奈川も極めて水源に恵まれた土地柄です。山々に降った雨は川の流れとなり、相模川と酒匂川の上流域へと至ります。ですから、私達は森の水を飲んでいるといえます。水源環境と水道水はとても密接な関係にあるのです。きれいな水には水源環境の整備は必須です。

森は雨として降った水をダムのように貯めてゆっくりと川に流すことから「緑のダム」と呼ばれています。森の土壌はスポンジのように多孔質で、蓄えた水をきれいにして川に流すことができます。しかし、これらの機能を最大限に活かすには健全な森であることが前提ですが、日本の森は手入れ不足が深刻です。現在、数多くある「緑の砂漠」と呼ばれる土壌が荒廃した森では、保水性が健全な森と比べてとても劣るので、「緑のダム」には不適です。

そこで、市や県では荒廃が進んだ森の健康と活力を取り戻し、良質な水資源を確保するために様々な取り組みが行われています。県内の水源エリアの三割にあたる相模原の森では間伐、枝打ちなどの森林整備が進められ、「水源の森林づくりエリア」の再生にも取り組んでいます。また、豊かな水源地域の森を次の世代に確実に引き継ぐこともとても重要です。

その対策として神奈川県では「かながわ水源環境保全・再生施策大綱」に基づき、「実行五ヶ年計画」によって十三の様々な計画で具体的な活動が行われています。

地球にはとても大きな海があり、水は限りなくあるもののように思えます。しかし、私達が実際に使える水は地球上にある全ての水のうちのたった〇・〇一％しかありません。

数年前、朝起きると水が出てこないと母が困っていました。何度も蛇口をひねっても水は全く出てきませんでした。仕方がないので、冷蔵庫にある麦茶で歯をみがき、顔も洗わず学校へ行きました。帰ってくると水はいつも通り出るようになっていましたが、もしずっと水が出なかったらどうなっていたでしょうか。手を洗うことも、食事を作ることも、風呂に入ることも、トイレを流すことも出来ないでしょう。水は私達の生活に不可欠な要素なのです。

蛇口をひねれば水がでてくるのが当たり前だと思っていましたが、改めて水の大切さについて考えさせられました。大切な水を守るために水を無駄に使わない、水を汚さないように心掛けていきたいです。

また、貴重な水資源を将来に残していくために水源環境を守らなければいけません。水源地を守るために私達はまず水についてもっと知り、関心を向けるべきです。そうすれば、国民と行政が一体となって水源環境を守ることができます。各地でボランティアによる森林整備活動も行われているので参加してみたいと思います。水に境はありません。ですから、県を通りこして、みんなで水を守ろうとすることが大切です。

入選

「水」の今と昔

長野県　伊那市立伊那中学校　三年　柳澤　侑美

朝、起きて顔を洗います。ご飯を作るために野菜を洗います。食器を洗います。歯をみがきます。お風呂に入ります……。このすべてに、水が使われています。つまり、私たちの生活には『水』が不可欠なのです。ではもし、今の生活になくてはならない『水』がなくなったらどうなるのでしょうか。普段、水道の蛇口をあければ出てくる水が止まり、きれいな水で顔を洗うことも、野菜を洗うことも、お風呂に入ることもできなくなります。もちろん、安全でおいしい水も飲むことができなくなります。今の日本は水資源が豊富で『水不足』になることはないと思います。

ですが昔、私の住む上伊那に流れる小沢川という川で、水不足による、水あらそいが絶えませんでした。そのころ農家は米作りが中心で、夏になると小沢川の水が少なくなるので、あちらこちらで水あらそいが起こりました。ある水あらそいに加わった、御子柴艶三郎という男がいました。艶三郎は水あらそいでケガをしてしまいました。艶三郎は、「川の水量はきまっているのに、水あらそいを続けるのはよくない。米作りの他に収入があれば水あらそいはおさまるだろう。」と考え、養蚕を始め、人々にすすめました。しかし蚕が次々と死んでしまう病気がはやり、養蚕をあきらめるしかなくなってしまいました。そんなある日、上の原台地という所で、崖の下の砂が水をふくんでいることに気がつきました。艶三郎は、「地下に水が流れているにちがいない。」と思い、村の人々に説得しました。ですが、人々はだれも信じてくれませんでした。艶三郎はあきらめきれず、自分の家の裏に井戸を掘ってみました。すると、水がこんこんと湧きだしてきました。このこともあって、人々は艶三郎の話を信じるようになりました。艶三郎は、自分の命とひきかえに、上の原台地に水を出し、農民の苦しみを救って下さいと神に祈りました。艶三郎は試し掘りをして水脈に当たるところを井戸にする、という井戸を百メートルおきにいくつもつくり、たて井戸に水を集め、その水を水田に利用しようと考えました。艶三郎は生き埋め覚悟で先頭に立ち、掘り続けました。三年目の春、ついに水が出てきます。村の人々は大いに喜び、艶三郎に感謝をしました。明治三十二年の暮れ、小沢川の水あらそいから二十年。大仕事をなしとげた艶三郎は、約束どおり、自らの手で命を絶ちました。

艶三郎は、命をかけて村を救ったのです。私はこの話を聞いた時、とても感動しました。今、蛇口をひねれば、いくらでも水は出てきます。ですが昔は水を手に入れることが難しかったのです。多分、これは上伊那に限った話ではないと思います。どこの地域も同じことだと思います。

普段、このような歴史を考えながら水を使う人は少ないと思います。水がなければ私たちは大変困ります。顔も洗えず、野菜も洗えなくなるため、不衛生なまま食べることになります。そう考えると、よく水を出しっぱなしにしている私は、大切な資源を無駄にしていることになります。

水は永久になくならないとは限りません。今、私たちが水を使えているのは、多くの人が関わって下さっているからです。このことを忘れずに、水を大切に利用したいと思いました。水が手に入らず、苦しんでいる人は今も昔もたくさんいます。そのことを考えると、水を毎日使える私たちは幸せだと思いませんか。

水を大切に使うことが、水を安全に使えるようにして下さっている方たちへの、一番の感謝になると、私は思います。

入選

心の鏡

静岡県　静岡県西遠女子学園中学校　三年　田中　朱理

私の弟は工作が好きだ。毎日、画用紙や折り紙を切っては貼り付け、その紙によくわからない絵をかいたりしていた。

ある日、私が弟に

「今日は何を作っているの。」

と聞いた。弟は何も言わなかった。私は弟の手元をのぞき込んだ。するとそこには、「水の出しすぎ注い。シャワーは使わないときは止める。」と書いてある小さなメモの切れはし。

「その紙、どうするの。」

と聞くと弟は

「お風呂の戸の近くに貼っておくの。」

と言った。私は少し感心した。いつもよくわからないものを作っていて、ゲームばかりやっている弟がこんなものを作るんだ、と。お風呂の戸の近くに貼った注意書きは、お風呂に入る前、必ず目に留まった。自然と、シャワーの出しすぎには気を付けないと、と思える。弟の案はかなり良いものだった。

私と弟と私の母は去年の夏休み、駅で開かれていた「上下水道フェア」に参加した。水についての様々なクイズが設けられていて、小さい子でも楽しめるイベントだった。クイズの一つにこんなものがあった。

「水に溶けるのは、ティッシュペーパーかトイレットペーパー、どちらでしょうか。」

正解はトイレットペーパー。私はトイレットペーパーが水に溶けることは知っていたが、どのように溶けるか、ときかれたら想像がつかない。そこで実験を行った。水の入ったペットボトル二本に、それぞれティッシュペーパーとトイレットペーパーを入れる。そしてキャップを締め、よく振る。すると、ティッシュペーパーは水に溶けずに浮遊していた。一方トイレットペーパーは粉々になって、水の中に散乱していた。トイレットペーパーはこんなにもよく溶けるのか、と大変驚いた。下水処理場には赤ちゃんのおむつなど、水に溶けない物が流れてくると聞いた。水に溶けない物をトイレに流すと、下水管がつまってしまう。トイレだけでなく、台所の流しもそうだ。油やカレーなど、こびりつきやすい物を流すと、下水管の中で固まって流れを悪くする。すると下水管は汚れる。そこを流れる水も汚れる。そんなことなんて気にも留めず、平気で水に溶けない物を流す人もいる。一人一人が意識を持って生活しなければ環境はどんどん悪くなっていき、私たちの生活も苦しくなるかもしれない、とこの上下水道フェアに参加して改めて強く感じた。

私たちの体の七割は水分である。その水分が少しでも失われたら気分が悪くなる。体だけではない。私たちの日常生活も水によって支えられている。しかしその水は、私達の心の乱れによって汚されている。水は、私たちの心を映す鏡なのではないか、と私は思う。昔問題になった公害は、一般家庭や工場から流れ出た洗剤や油が原因である。海や川が汚染され、そこに住んでいた魚も当然汚染される。その魚を食べた人間を水俣病やイタイイタイ病が苦しめた。当時の海や川には、人間の軽い気持ち、油断が映されていたに違いない。一人の油断は皆の油断である。でも、たった一人が気を付ければ、それを知った人は水に対しての意識が高まる。私は弟から教えられた。ふと、海や川を見たとき、その鏡には何が映るだろう。私は願う。人間一人一人の水に対する高い意識、そこに住む魚の気持ち良さそうな泳ぎが映れば良いと思う。そしてその水を、私は大切に使いたい。感謝の気持ちを込めて。

入選

「川のある町」

三重県　高田中学校　一年　水野　亜美

初夏の日差しは、真夏以上に厳しく感じる。額から、玉のような汗が流れてくる。首にかけたタオルで、汗をぬぐっては、枯れ木や空き缶を拾って、ゴミ袋に入れていく。少し先には、一心不乱に地面に目を光らせる、父の姿も見えた。

私が住む、三重県伊勢市に流れる勢田川は「三重県で一番汚い川」と言われている。勢田川は、江戸時代には、伊勢神宮へ献上するための魚を獲ったり、おかげ参りの客や物資の輸送をしたり、大変にぎわっていたと言う。勢田川沿いには、その水運を利用した問屋街として発展した河崎の町なみが今も、当時のまま続いている。黒壁の古い蔵が、勢田川沿いに連なっていてとても風情がある。自慢の町なみだ。遷宮以来、外国人も含め、河崎まで来てくれる観光客が増えてとてもうれしく思う。

ところが、その美しい町なみを流れる勢田川はというと、第二次世界大戦後、陸上交通が発達したことによって川を使った移動が激減し、さらに市街地を流れるために生活排水の流入も加わって水質汚濁が進んでしまった。母が子供の頃は、ヘドロ臭がただよい、鼻をつまむ程だったと言う。空き缶やゴミも川に浮かんでいるのが普通だったと聞き驚いた。

これではいけないと地域住民が立ち上がり、様々な活動が行われてきた。「七夕大そうじ」はその一つで、七夕ごろに、「勢田川を天の川のようにきれいにしよう」と始められた住民による川、川岸の大そうじである。もう二十年も続いている一大イベントで、約二千人近くの市民、ボランティアが参加し、平成二十七年度は、燃えるゴミ二八五袋、草千二百六十九袋十二トン車七台分、空き缶五十袋が回収されている。伊勢市の人口が、十二万人だからかなりの人が、勢田川を何とかしなくては、と思って、行動に移している事が良く分かる。

「湯水のように使う」という言葉がある。日本は四方を海に囲まれた島国で、降水量も多く、水は空気のように存在して当たり前と考えられてきたのだと思う。実際に、蛇口をひねればきれいな水はいつでも出るのが当然だと私は思っていた。海外では歯みがきに必要な水も水道水は使えない国がある事を知って、ショックを受けた。今まで、いかに恵まれた環境にいるのか分かった。当たり前のように恩恵だけ受けて私は水に感謝する事も、大切にする事もしていなかった。汚れた勢田川も、人間が汚してしまった結果である。私にできる事を考えてみた。まず、油物や食べ残しは紙やティッシュでふき取ってから洗う事、洗剤や石けんの使いすぎをしない事、歯みがきの間、水の出しっぱなしをやめる事、長時間のシャワーをやめる事。今まで、母が風呂の残り湯を洗濯に使うのを、何となく貧乏くさいなあと嫌だったが、それは節水にもなるし、いざ災害が起こって断水になった時に、備えているのだと知った。母の事を、恥ずかしく思っていた自分が一番恥ずかしいと思った。

中学生になりたての私ができる事は大した事はないかもしれない。でも、始めるのにおそすぎる事はないと思う。今の私にできる事を一歩ずつしていきたい。

「はい、お疲れ様でした。」みんなにジュースが配られた。冷えたジュースが体中にしみわたる。真っ赤に焼けた肌がヒリヒリ痛いけれど、頑張った勲章のように思える。来年もまた参加しよう。来年はゴミがもっと減っているはずだ。私の大好きなこの伊勢の河崎の町なみをたくさんの人に訪れて知ってもらいたい。

入選

私の町の水

京都府　舞鶴市立城南中学校　三年　中村　姫菜

きらきらと輝く水面に、私は胸を踊らせた。水の流れに手を浸す。驚くほど冷たくて、滑らかな感触。そして、私達の町には、これほど綺麗な水が流れているのだと感動を覚えた。

日本には、湧水がたくさんある。しかし今、湧水は急速に枯渇・消失しているらしい。その原因として涵養域の減少がある。涵養域とは田や畑、森林など、雨水が浸透し、地下水を蓄える場所のことで、近年は道路がコンクリートになったり、家が建ったりして少なくなってきているそうだ。これでは、地下水の減少とともに、大雨が降った時、洪水になる恐れがあったり、水循環がうまくいかない。水のその恩恵を私達の作ったもので壊してしまうのは勝手だと思う。このことを知り、私は自分の町の湧水について、見に行ったり、地域の方に聞いたりして調べることにした。

私の住む舞鶴市には、真名井の清水という湧水が開水路として、町の中を江戸時代から流れ続けている。正確には伏流水による湧水で、近くを流れる川の水が土に染み込んで、浅い地下でろ過され、綺麗になって地表に湧き出ているものだ。安定した水質でこれまで一度も枯れたことはないらしい。ここで生まれ育った私にとって真名井の清水という存在は、気づくと自分の中にあった。清水が流れる池には、幼い頃両親と散歩へ行ったし、登下校では毎日並んで歩く。その流れを眺めることは毎日の一部であったが、私はその多く、どこから湧いているかすら知らなかった。家族や友達も知らない人が多かった。昔は生活用水として使われていた水も、今は水道が普及し、人々の関心の中から遠いものになっている。私もその一人だ。水は、身の周りのいろんな所で役立っている。湧水の担う役割も実はとても大きいのだ。

町の周辺環境に湧水は広く関わりがある。湧水は周囲の緑を創り、池や水路は生き物の貴重な生息域になっている。湧水を保全することで、多様な生物の住む場所も守られる。私も小さな頃は、ザリガニや魚、亀を捕まえたり、清水に足を浸したり、豊かな自然を一身に受け育った。湧水は私達が自然の水に触れられる貴重な場であるとともに、町に自然を広げる中心となっているのだ。

それだけでなく、湧水は災害時に冠水などした際、生活用水として使うこともできる。トイレや洗濯、また飲水として使える所もある。しかし、この町に湧水があると知らない人はたくさんいるはずだ。私も以前知らなかったから、災害時に利用できなかっただろう。だから、ハザードマップに湧水、井戸の場所も載せればいいと思う。また、水源地の近くに水汲み場を設ければ、災害時にスムーズに利用できるほか、一目で湧水だと分かる。だが、その湧水が汚かったり、枯れてしまえば利用できない。私達の町では、御水道掃除と称し、年に数回ごみ拾いや、水路の雑草の掃除をする。私も参加したことがあり、同じ学生や大人、お年寄りも取り組む。それもあり、真名井の清水は平成の名水百選に選ばれた。とても名誉なことであり、私はこの町にこんな自慢できる所があったことが嬉しかった。

今回調べ、知るのと知らないのでは見え方が変わった。町を流れる水から、さんさんと活力が溢れているように感じた。水は私達の町の元気や穏やかさを創ってくれているのだ。こういう良い所を知れば私と同じように、守りたいと思う人が増えるのではないか。だから多くの人に知ってもらい、一緒に保全していきたいと思う。例えば、回覧板や地域の掲示板に紹介を載せたりすることなら私にもできる。まずは私のできることをやっていきたい。難しいだろうが、そんな動きが日本へ広がれば嬉しい。そして数十年後も、多くの人が町の水を誇りに思えるようにしたい。

入選

水と生きる

岡山県　岡山市立吉備中学校　一年　稲田　知陽

私が住む岡山市には、笹ヶ瀬川が流れている。笹ヶ瀬川は、昔話「桃太郎」の初めに桃が流れてきた川だと伝えられている。

私の家から一キロ先にある笹ヶ瀬川の土手まで私はよく散歩する。そこで必ずすることがある。それは水位電光板の数値の確認だ。幼い頃から一緒に歩いていた叔母がしていたから、私も自然に行うようになった。

笹ヶ瀬川からは多くの用水が流れている。水はきれいで、メダカもたくさん泳いでいる。昔、農家で使っていた川舟も浮かんでいる。

その中の一つに境目川がある。この川を境に、以前は備前と備中に分かれていたそうだ。今見ると、幅数メートルほどしかない、普通の用水路だが、調べてみると千年近くの歴史があり、特に十八世紀頃には、水利をめぐる争いが激しかったことがわかった。

今私は生活していても水に不自由してはいないのに、同じ土地で紛争があったことに、とてもびっくりした。

私が水に関心を持つようになったのは、叔母の影響が大きい。叔母は、以前、青年海外協力隊で、南米エクアドルに行っていた。叔母は、二年間の生活で水についての価値観の違いに気づいたという。

「知陽ちゃん、エクアドルでは、断水することがよくあって、水道が自由に使えないことが何日も続いたんだよ。だから、シャワーや洗たくができないこともあるんだよ。」

「え～でもそれだと体を何日も洗わないってこと?きたないよ。」

「そうだね。日本ではきれいな水がたくさん使えるから、そう思うのかもしれないね。でも、世界には水が使えない国もたくさんあるんだよ。熊本の地震でも、水がなくて困ってた人がたくさんいるよね。水が自由に使えるに使える私達だからこそ、水についてしっかり考えていかないといけないね。」

叔母の言葉を聞いて、私は「水」のありがたみを改めて感じた。以前から私の家はよく水を再利用していた。例えばお風呂の残り湯だ。残り湯は、いろんな役に立つ。ある時は洗たくに、ある時はそうじに。さらに私の祖母は、たるの中に湯をため、庭の水やりに使っている。

私にとっては、当たり前だった水の再利用。その一つ一つは本当に小さなことだけれど、毎日続けると水の大きな節約につながる。水をむだ使いせずに生きていくことができるのだ。我が家の小さな再利用は、私の家族が、水に対して、しっかり向き合っているから実現しているのだと思う。

私は、学校でも節水に努めている。小学校の時は、下級生が水道のじゃ口をきちんと閉めていない時、出しっ放しになっている水を一つ一つ止めていった。「これくらい、いいじゃないか。」と思われていたかもしれないが、小さなことから節水の意識を持ってほしかった。私達子どもが、水を大切にしていこうという気持ちを持つことが、何よりも大切だと思うからだ。中学生になっても、水のありがたさを実感しながら生活していきたいと考えているし、まわりの友達にも呼びかけしていきたいと思う。

私の住んでいる地域に伝わる音頭に、こんな一節がある。

「月の砕ける笹ヶ瀬川によ
今宵も四つ手の灯が映る
白石川沿いよい所ヨイショ
ボッコええとこ一ぺん来られ
備前白石　芦の里」

昔の人が誇りにし、時には紛争も起き、しかしみんなで大切に守ってきた水。その恵みを、地域だけではなく、日本、そして世界で分け合えるといいなと思う。限りある資源、水とともに生きていきたい。

入選

「ウォーターライフ」宣言

山口県　高川学園中学校　一年　田中　美伶

祖父の家の前を流れる小さな川。そこは、錦川の上流であり、沢山の思い出が詰まった場所である。

一番に思い出されるのは、夏の風物詩であるそうめん流し。川の水を水車で汲みとり、半分に割って節を除いた竹に流し込む。そこに流して食べるそうめんはひんやりとして、のどごしが良い。毎年親せき一同が集まる大イベントで、楽しく過ごした。また、蛍観賞も印象深い。日が落ちて川沿いの道で待っていると、草の間から光が湧き出てくる。暗く静まりかえった空気が暖かくなる瞬間だ。こうした思い出は私にとっては当たり前であるが、改めて考えると、キレイな川である事が大前提であり、私はとても恵まれていたのだと実感する。

普段、キレイな水に触れる事、好きなだけ水が使える事に感謝の気持ちを持っていなかった私は、水の無駄使いをしていることに気付いた。シャワーを流しっぱなしにする。手を洗う時にむやみに水を使う。挙げていけばきりがない。学校や自宅で、いつも「水を大切に」、「水資源には限りがあります」、「水が減っているんです」と言われているにも関わらず、全く注意していなかった。先日起きた熊本地震で、避難している人が高校の校庭に飲み物を求めるＳＯＳの文字をつくっているというニュースを見て、水不足で苦労していらっしゃる方々に申し訳ない、そして自分が情けないと思った。当たり前のように安全な水を飲んで、使っていることに感謝しなければならない。

そもそも、普段、蛇口をひねって出てくる水は、川の水が元なのだから、水の無駄使いによって、錦川のようなキレイな川を失ってしまうかも知れない。世界の湖や川がどんどん枯れていき、外資が日本の森林を購入しているのを考えれば、その可能性は高いといえる。

私の夏の思い出は、キレイな川と共に存在する。キレイな川を失うのはとてもさみしい事だ。私はキレイな川を守る方法を考えた。

まず、生活排水が川へ流れて汚れた場合、水を魚が住める状態にするのにどれだけの水が必要になるのかを知ってもらうことだ。今回調べたところ、マヨネーズ大さじ一杯分が川へ流れると、キレイにするのにお風呂（三百リットル）十三杯分もの水が必要だ。又、天ぷら油二十ミリリットルが川へ流れると、お風呂二十杯分の水が必要だと分かった。信じられないような事実を知ることで、水を汚したまま川へ流すことへの抵抗が出てくると思うので、「知る」ことにも大きな意味があると考える。

次に、台所からの生活排水を減らすことだ。私たちの出す生活排水の内訳を調べると、台所からの排水が四割を占めているので、台所排水を減らすことが不可欠であると思う。具体的には、米のとぎ汁を植木の水やりに使ったり、出来るだけ目の細かい水切り袋を使用するというような取り組みが考えられる。

最後に、川にある石を、苔の生えやすい萩市の安山岩にすることだ。苔は、川をキレイに保つことが出来、蛍の生息する環境を守ることができるのだ。まず、水の中の汚れを吸収することができる。又、石積護岸に安山岩を使えば苔によって蛍が這い上がりやすくなり、さらには川に苔があると蛍は卵を産みつけられるという習性があるので、石を置くことで大きな成果があると思う。

今回、普段何気なく使っている水について、改めて色々調べ、考えてみた。これから、生きる為だけでなく、キレイな水が思い出を作ってくれるような心豊かな生活が送れる様、一人一人が生活を見直し、改める必要がある。

私はここに、水を大事にする生活「ウォーターライフ」をスタートする事を宣言する。

入選

命の水

徳島県　阿南市立那賀川中学校　二年　松本　遥花

一年生の国語の授業で「ルビンの壺」を学習した。いわゆる「だまし絵」のようなもので、「同じ絵でも見方を変えれば違って見えてくる」といったことから、ちょっと立ち止まって（様々な角度から）物事を見てみようといった内容だったと記憶している。最近それを再確認する経験をした。

「嫌やなぁ。また、雨か・・・。」夕食の準備を手伝いながら、明日の天気予報を確認して思わず長い溜息をつく。せっかくの連休なのに、自転車の私は出かけることも出来ない。どうしようもないことは頭では理解しているけど、何だか心が納得しないのだ。

「雨が降らんかったら、稲も育たんし、雨は無かったら無かったで困るんよ。」そんな私の背中に向かって、一昨日田植えが終わったばかりの祖母が、ご飯をよそいながら慰めるように優しく話しかけた。

途端に「ルビンの壺」が蘇った。そうだ。雨が必要な人もいるのだ。自分の立場だけで一面的に判断している自分をちょっぴり反省した。

夕食後、庭に出てみた。二週間前、曇り空の下でプランターに植えた「おひさまコーン」がほんの少し芽を出していた。田んぼで精一杯背伸びをしている植わったばかりの稲達や生ある全ての動植物が「水を待っている。」そんな気がした。

また、現在も余震が続いている九州地方の大震災でも「水」について考えさせられた。水道も止まり、生活に必要な水が不足する状況が報道され、全国からたくさんの水が届けられた。その様子が毎日映像で流れ、私も少しほっとしたが、そんな中、ある日のニュースにどきっとした。

部活動が終わって帰り、夕食前にテレビをつけた時だ。地震発生から一週間が過ぎた頃熊本市と益城町で支援物資の受け入れ状況について担当の方にインタビューがされていた。後ろには山積みされた飲料水のペットボトルが写っていたが、担当の方は困ったような複雑な表情を浮かべていた。断水の中で全国から届く大量の水は、本当にありがたいのだが、ペットボトルの水ではトイレや風呂、シャワーにはすぐに使えないのだ。つまり、もちろん飲み水も必要だが、「現在」本当に必要なのは「飲料水」ではなく「生活用水」なのである。「ルビンの壺」を思い出した。相手の立場に立って、（客観的に）様々な角度から考えることの重要性を私は水についての三つの体験から学ぶことが出来た。

蛇口をひねったらすぐ、水は出てくる。洗濯にもお風呂にも使える。別に「味？」にこだわらない私は、ペットボトルでなくても、おいしく飲むことも出来る。それが「当たり前」になっていた。しかし、「当たり前」は本当に「当たり前」なのだろうか。

先日、少し前までインドネシアに住んでいた叔母が祖母を訪ねてきた。気になっていたので水事情を聞いてみた。インドネシアでは蛇口をひねっても水が出ないこともよくあるということだった。一流ホテルでも水道水は飲めないこともあり、飲料水は大きなサイズのペットボトルで買うことが多いらしい。野菜や果物でもそれを洗う水まで気を遣わなくてはおなかを壊すことになると話してくれた。水道の水は白い服を三回洗うと、黄ばんでしまうくらいに汚れているということだった。

私たちの身体の約七〇％は水で出来ている。そのバランスがほんの少し崩れただけで熱中症や脱水症など体の中のＳＯＳが届く。地球上に生きる私たちは、どんな状況の中でも「命の水」なしでは生存できない。

老子は、「上善水の如し」と生き方の理想を水にたとえた。インドネシアでの例にあるように水とのつきあい方は一様ではない。いつも傍らにある「命の水」とどう関わるかは、これからの私たち自身の姿勢にかかっている。

入選

水は命～大渇水から学ぶ～

香川県　坂出市立東部中学校　二年　竹村　舞祐

「こらっ！水を出しっ放しにしたらダメやろ！無駄にして、もったいない！」私は小さい頃、よく水を出しっ放しにしてしまい、母に見つかっては怒られた。私も、もちろんいけないことだと分かっていたが、ついうっかりしてしまう。そもそもなぜそんなに水を大切にしないといけないのか、あまり分かっていなかったのだ。

蛇口をひねれば当たり前のように新鮮で豊かな水が出てくる。しかしそれが当たり前ではない国もたくさんある。ある日、私は外国で私よりも小さい子供達が、学校へ行って勉強したり、友人と遊んだりすることもままならず、毎日半日以上かけ、遠く離れた所まで重い水をくみに行く映像を見た。しかもその水は、私達が普段何気なく使っている、あの透明な水には程遠く、とても水がにごっていた。そのような不衛生な水のために、病気になり、死に至ると知り、胸が痛んだ。

これらから私は、いつでも安全な水を必要なだけ使えるのは当たり前ではなく、ありがたいことなのだと改めて気づいた。

去年の夏、母がこんな話をしていたことを私は、思い出した。

「あなたが生まれるずいぶん前のことだけど、香川県では大渇水が起きて水が使えなくなったことがあるの。お母さんは、それを体験したから水の大切さやありがたさが分かるの。」大渇水…？その言葉を耳にした私は、その言葉の意味は理解できなかったが、水は無限にあるわけではなく、使い過ぎてはいけないのだ、というのは分かった。

香川県には手洗い場やトイレなど至るところに「水を大切に」などを呼びかけるポスターが貼られている。各家庭には「節水」と書かれたチラシが配られる。なぜ香川県はこんなに節水意識が高いのだろうと考えた時、ふと以前母に言われたことを思い出した。母に尋ねてみることにした。すると、

「この量の水で、食器洗いをしてみて！」

答える代わりに母が差し出したものは、洗面器にたった一杯の水。「食器はたくさんあるから、そんな量の水だけでは絶対に足りない、無理だ。」と思っていると、

「お母さんは、できると思うよ。」

と私の心を見透かしたように母が言う。そこで私は、できるだけ効率のよい方法を考えてから実践してみた。洗う前に油汚れをあらかじめ取っておき、洗剤を使い過ぎず、すすぐ水は少しずつ大切に使う。この方法を守って実践してみると洗面器一杯の水では少し足りなかったが、普段の食器洗いの水の使用量を大幅に減らすことに成功した。

母は私の奮闘ぶりを見て、にっこり笑い、大渇水の時の思い出を話し始めてくれた。ひどい時には水道の蛇口から水が出る時間は、たった四時間。バケツに水を溜め、その水を一日大切に使うのだ。当然、洗濯や入浴は毎日できない。我慢して我慢して、水をとても大切に大切に使ったそうだ。

「水がないと生きていけないでしょう。それなのに、人は水を無駄にしても平気でいるなんて、おかしいと思わない？」

私は母の話にとても驚いた。水が使えるのはありがたいこと。だから、私は、母に言われて食器洗いの方法を見直したように、身の回りの些細なことから、水資源を守る取り組みをしていきたいと思うようになった。入浴中のシャワーの時間の短縮、洗い物や、歯みがきで水を出しっ放しにしないなど、私にもできることがたくさんある。一人一人が身の回りの身近なことに目を向け、実践していけば、もっと豊かな世界になると思う。

水は命。水を守るということは命を守るということ。香川の大渇水から得た教訓を忘れずに、水が使えることに感謝してこれから、生活していきたい。そして豊かな水資源を、私達が守り続けていきたいと思う。

入選

命の資源「水」

愛媛県　松山市立椿中学校　三年　芝辻　隼人

突然の緊急地震速報で、とっさに机の下に潜り込んだ。熊本地震である。数日後、僕の目に新聞のある写真が飛び込んできた。

〈カミ　パン　水　ＳＯＳ〉

校庭に椅子を並べて作られたそのメッセージが、物資や水の不足の深刻さを物語っていた。他にも、給水車の前にできた長蛇の列や、両手に大きなペットボトルを持った子供達など、被災された方々の苦しい生活を知り、胸が痛んだ。

僕が住む松山もかつて同じように水不足に苦しんだ経験がある。僕が生まれるずっと前の平成六年、松山で大渇水が起こった。大渇水とは一体どんなものだったのだろうか。経験された先生方に当時のことを伺った。

「あの年は記録的な高温・少雨でダムの水が涸れてしまった。給水制限によって一日に二、三時間しか水が出ない日もあったんだ。」

「私も実際にダムを見に行ったのですが、完全に干上がってカラカラでしたよ。」

「生活の変化などは？」

「給食が変わったね。水を使わないメニューになった。魚肉ソーセージとかイリコとか…。掃除もぞうきんが使えなかった。体育大会は午前中だけだったな。」

「私が当時いた学校では、水不足でその学校の象徴の木が枯れてしまった。あの年は、人間にとっては渇水の一年だったけど、植物にとっては死の一年だったんだ。」

先生方の話に大きな衝撃を受けた。あの年から、松山の人の節水意識は高くなった。ある先生は今でも食器を洗うときは、必ず下にたらいを置いて糸ぐらいの水しか出さないそうだ。

今では松山は、『水を大切にする街』として僕たちの誇りとなった。至るところに貼られている「水を大切に」「節水をしよう」といったポスター。テレビで毎日放送されるダムの貯水率。「水は当たり前にあるものではない」大渇水から学んだそんな教訓が、今でも松山の人の心に残っている。軽い気持ちで水を出しっ放しにしていた自分が、恥ずかしくてたまらなくなった。

世界の水について考えさせられる機会もあった。修学旅行中にオーストラリアのご夫妻にインタビューをしたときのことだ。

「あなたの国は水を自由に使えますか？」

「ＮＯ（いいえ）。」

えっなんで。そんな僕の心を見透かしたように、ご夫妻は優しく教えてくれた。

「Ｄｒｏｕｇｈｔ（不足しているから）。」

あの一言がなかなか耳から離れなかった。世界には水で苦しむ人が何億人といる。その影響で命を落とす人もたくさんいるのだ。わかっているようで、全くわかっていなかった世界の水。日本は蛇口をひねるとすぐに安全な水がでてくる、水資源の豊かな国だ。僕も蛇口から水がでるのが当たり前になっていた。しかし、世界には当たり前がない人がたくさんいる。このことを、忘れてはならない。

今回、水について多くのことを見て、聞いて、学んで、考えた。今までの恥ずかしい自分にも気付いた。そしてこれからの生活に一つ目標ができた。それは、「水を無意識に止める習慣」を身に付けることだ。手を洗う時、歯を磨く時、シャワーを浴びるとき…。一滴たりとも水を無駄にしたくない。些細なことかもしれないが、そんなことから節水につながる取り組みをしていきたい。水資源を守るために、自分に何ができるだろうか。そんな探求の心を常に持ち続けたいと思う。

水がないと人は生きられない。大昔から、人間は水のあるところを住処として生活してきた。水は僕たち人間の源であり、命である。

これからも、小さなことから水を大切にしていきたい。命の資源である水を守り続けるために。

入選

水のある風景を守るために

愛媛県　新居浜市立西中学校　二年　松本　彩花

めだかや小ぶなの群れが泳ぎまわる澄き透った小川。岸にはれんげやすみれの花が咲き乱れている。これは、「春の小川」の歌詞に出てくる風景である。

合唱部に所属している私は、日々の生活が歌であふれている。私にとって歌とは、その時代を反映しており、歌詞やメロディーを映像として感じとることができるものである。「春の小川」は私が小さい頃に母がよく歌ってくれた童謡で、とても大好きな歌である。この歌を聴いていると、水面がキラキラと光っている小川の映像と、水の流れる音が聞こえてくるようだ。そして、この場所はきっと空気がおいしくて、のどかであり、美しい景色に違いないと想像してしまう。しかし、このモデルとなった小川は今はもう存在しない。埋め立てられたのだ。他の童謡でもみられる日本の風景は今はもう少なくなっているのではないだろうか。

「子供の頃はよく近所の川の中に入って、魚をとって遊んだよ。」

と、母は言った。また、祖母も、

「高梁川では潮干狩りができて、あさりを食べていたんだよ。今では見ないねえ。」

と、教えてくれた。母達の話しぶりから、今と昔ではあきらかに景色が変わっているようだった。それに、母達にはある川での思い出が私にはなかった。身近に水遊びをする川がないこともあるが、昔はきれいだった河川が汚染されて、遊べなくなってきたのではないかと考えられる。

河川の汚染はなぜ起きて、どのような影響があるのだろうか。日本の水質汚染の歴史を調べてみると、高度成長期の頃より工業排水や産業廃棄物の不法投棄による汚染があった。現在では、人口の増加や生活水準の向上による一般生活廃水が汚染の大きな原因であるようだ。汚染された河川は透明度を失い、悪臭を放つ。そしてそこで生息している生物を死滅へと追いやっていく。又、水を利用することで人間の健康被害が起きる可能性があるのだ。

私は今まで、水に対する危機的感情など全くもっていなかった。なぜなら、水に困った事がないからだ。水道の蛇口をひねると飲用水がどの国よりもきれいな状態で出てくる。毎日お風呂にも入れ、トイレもいつもきれいだ。何も考えなくても日常生活の中に水がある。無くなることなど考えられない。でもそれは違っていた。水源には限りがあるのだ。だから、水を守る取り組みをしていかなければならない。

私ができることは何があるだろうか。さっそく家族で話し合ってみた。

「まず生活排水を少しでも減らす努力をしてみよう。」

ということになった。母は、台所から出る汚染を少なくする努力をする、残飯が残らないように料理をして、みんなが残さず食べる、食器や調理器具についた汚れや油は拭きとってから洗う、自然にやさしい洗剤を検討する、排水溝へゴミを流さないようネットをかける、みんなで節水に努める、特に兄は朝のシャワーをやめる、ゴミのポイ捨てをしない、河川や側溝の清掃に積極的に参加する、等を決めた。そして、いつも水について関心を持ち、大切にしていこうと話し合った。

私は、これからの自分のために又、未来の子供や孫達のために、「春の小川」のような景色を残していきたい。だから、水のある風景を守っていく努力を今日からしていく。

入選

水の大切さに気づいた今

大分県　豊後大野市立緒方中学校　三年　佐藤　千春

「水が出らんっち、せっちいなぁ……」

一般的な家庭とは違い、山の麓の川からの水を飲用水として利用している私の家では水が出なくなるということがよくある。貯水槽と呼ばれる大きなタンクに川からの水を貯め、そこから各家庭へと水を運ぶのだが、水を運ぶパイプの劣化などが原因で貯水槽に水が溜まらず、各家庭へ運ぶ水が無くなってしまうことが原因として挙げられる。水が出ないとわかった時にはすぐに祖父母がトラックに五百リットルもの水をくむことができるタンクを積み、川へ水をくみに行ってくれる。くんできた水はタンクからバケツに移し、お風呂や洗濯機まで何度も何度も往復し水を運ばなければならなかった。私も一度手伝ったことがあるが、一往復でもかなりの労働で何往復もするのはとてつもなく大変な作業だった。母と一緒に家事を行う祖母も、もともと患っていた膝の痛みがそのような作業を繰り返していくうちにひどくなっているようだった。そんな時に、祖母は時折この言葉を心底まいったような表情を浮かべため息混じりに口にする。そんな祖母を見て私はこう後悔するのだ。あの時少しでも使う水を考えていれば、もう少し長い時間水が使えたのではないかと。しかし、そう思うものの、普段の生活から“節水”を心がけることはなかなかできないもので、「少しくらいいいか」と考えてしまうのだ。そして、水がでないという状況に陥り、祖母のこの言葉を耳にして心がずっしりと重くなってしまうのだった。少なからず私は、水道から水が出る生活を送っている人たちよりも、水の大切さについては実感できていると思っていた。

しかし、そんな私を水という資源としっかり向き合わせてくれた出来事があった。

四月十四日に熊本県で最大震度七を観測する大地震が起きたのだ。地震により家屋が崩壊し、連日続いた余震の影響で避難生活を余儀なくされている人たちが大勢いることをニュースを見て知った。食料も満足に手に入らず揺れへの恐怖に震え、十分な睡眠もとれないまま避難生活を続けざるを得ない人たちが、最も求めていたものが水だった。地震発生当初、熊本県の避難所となっている中学校で「のみ水をください」というメッセージがグラウンドに記されていたことを新聞で知った。一回一回トイレで水を流せない、お風呂に入ることはもちろん濡れたタオルで顔を拭くこともできない、汚れた手を簡単に洗うこともできない、今の私には想像できないことが被災地での現実だった。何度も断水を経験したことのある私でも、長い断水にはストレスがたまってしまうのだから、初めて断水を経験した人たちにとって三週間近い断水というのはとてつもないストレスになっているのではないだろうか。幼い子供や高齢者、身体の不自由な方と一緒に過ごしている家庭では水が手に入れば優先的にその家族のミルクにしたり体を拭くのに使ったりしているようだった。日常生活に大きな支障をきたしているため、一刻も早い水道の復旧を被災地の人たちは望んでいるに違いない。

以前は節水などあまり心に留めていなかった私だが、今回の震災を機に、友人や家族が水を必要以上に使っていたら声をかけている。自分自身でも毎朝の洗顔や手洗いの時など、使う水を最小限に抑えている。また、祖母のあの言葉はもう耳にしたくない、少しでも長く水を使えるようにしたい、と考えていつも以上に節水を心がけるようになった。

水はいつでもあたりまえに使えるわけではないと気づいた今、わたしにできることといえば、節水することくらいなのだ。けれど私は、たったそれだけのことなのかもしれないが、普段の生活から常に節水を意識し、使う言葉を考えて水を使うようにすると改めて心に決めた。

入選

そこにある可能性

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　三年　﨑村　宙央

美しい。岩がきっちりと組み合って形作るアーチ。背中がぞくぞくする。「おーい、いくぞお」というかけ声がきこえてくる。すると、ザァー。水が川面に打ちつけられる音。石橋のまん中、アーチの真上から、水が、さながら滝のように落ちてくる。私はこれが大好きだった。

私は、幼いころ、石橋が大好きだった。私は熊本に住んでいたので、熊本の石橋をたくさんめぐった。そんな私が、一番好きな石橋が、熊本の矢部地方にある。

通潤橋だ。それは、ただの石橋ではない。水を運ぶ石橋なのだ。

江戸時代、水が湧かず、米が作れない台地があった。そんな台地に恵みをもたらそうと布田保之助という人が立ち上がる。石橋の上に水道管を通す。大量の資金と労力そして時間をかけ、通潤橋は完成した。

なぜ彼らは、そこまでして通潤橋にこだわったのだろう。それは、水を使って米をつくり、豊かになりたいという願いのためだ。江戸時代、経済の中心は、米にあった。水が湧かない台地では、米はつくれない。米の利益がないということは、村にとって相当の痛手だ。そこで、通潤橋のように水利用が発展していった。水利用が村を豊かにし、経済を支えていたのだ。

その後の日本は、近代化した。ビルや工場が建設される高度経済成長の時代。それに合わせて、水利用の姿も変わっていった。当時の日本では、急激な経済成長に発電所が追いつかず、停電が多かった。そこで、水利用である。谷の間に大きな壁があるのを見たことがある。人工湖を作っている、ダムだ。大型のダムを各地に作り、水力発電をした。そうして、停電を解消していった。日本の高度経済成長を支えていたのは、水利用だったのだ。

だが現代の世の中で、大型のダム建設は、ふさわしくないだろう。大規模なダムを建設するため、環境破壊の問題がある。さらに、コストも多くかかってくる。

日本には、たくさんの川がある。そこで小規模水力発電ができるのではないか。農業用水路や川に水車を設置する。これだけでもいい。これなら人の生活にうまくとけあうことも可能で、自然への負荷も少ない。そのため再生可能エネルギーにも指定されている。

このように、身近に水利用はできる。小規模水力発電は設備が小規模で低コストであり、しかも気候による影響を受けにくいために安定した発電量を得られる利点がある。日本中の川に設置すれば、莫大な量の電気を生み出せるだろう。

そんな中、水を利用した画期的な発電方法が開発された。水と太陽光のみで稼働する水素発電システムだ。水素は、電気分解で水から作り、必要な電力は太陽光発電でまかなう。水と再生エネルギーから水素を作るので、二酸化炭素を排出しない。すごい技術だ。これの本格的な稼働ができたら、エネルギー革命が起こるだろう。

今は、水の流れや蒸発するエネルギーを利用して発電している。だが技術開発により、水そのものを利用して発電することも可能になってくるのではないだろうか。近い将来、もっと効率的で革新的な水利用の姿が生まれてくると思う。

いつの時代でも、水利用が人々の生活を豊かにし、経済を支えていた。水は、日本中のどこにでもある。それらを利用すれば、未来の可能性が広がると思う。目の前にあるコップ一杯の水。私の顔が映っている。近い未来、その水には、何が映っているのだろう。それは分からない。可能性は無限にあるのだ。

コップの水に映るものは、必ず私たちに恵みをもたらしてくれる。昔も、今も、未来でも。

入選

水の神様への思いを受け継いで

宮崎県　高千穂町立高千穂中学校　三年　黒木　陽斗

我が家から歩いて数分のところにその神社はある。曲がりくねった木やツルに囲まれた神秘的な雰囲気の境内には、威厳のある拝殿と、隣には御神水の湧き出る井戸がある。冷たくておいしいこの水を求めて、県外から訪れる人も増えている。ここが龍神様を祀る神社、『八大龍王水神社』だ。

僕が生まれ育った高千穂には、神話にまつわる場所がたくさんある。その中には水と関係の深い場所もある。例えば、前述した八大龍王水神社や、真名井の滝や特徴的な岩壁で有名な高千穂峡などだ。高千穂峡は、火山の噴火によって流れ込み固まった溶岩を、川の水が浸食してできたと言われている。昔から人々は、このような自然の大きな力を神の仕業として崇めてきた。水の力もその一つだ。

こうして、昔から大切にされてきた水だが、最近は水のありがたさが薄れてきているのではないかと思う。蛇口をひねればいつでも水は出てくるし、あちらこちらにある自販機では、ジュースやお茶、飲料水を購入することができる。しかし、一方で水質汚濁などの問題も生まれた。高千穂峡でも生活排水の垂れ流しによる問題があったと聞いたことがある。異臭がしたり水が濁っていたりしたそうだ。高千穂峡の中でも有名な真名井の滝の水は、『玉垂（おのころ）の滝』という滝から来ており、これは高千穂町の水道の水源でもある。

生活排水によって汚れていた高千穂峡も、今ではきれいな水が流れ、多くの観光客で賑わっている。これは、下水道の整備によるものである。下水道の仕組みについては小学校のときに学んだ。たくさんの行程を経ていることを知り、あらためて汚水を処理することの大変さを思った。このように、きれいな水のために大きな役割を担っている下水道だが、全ての地域に整備されているわけではない。僕の暮らす岩戸地区も下水道がない地区だ。では、汚れた水をそのまま流しているのか、気になって母に聞いてみたところ、

「古い家にはないかもしれんけど、この辺は浄化槽がある家が多いよ。」

と言われた。浄化槽とは、各家庭に設置される小さな下水処理場のようなものだそうだ。これによって水をきれいにしてから川に流しているという。ただ、注意しなければならないこともあるようだ。取り除いた汚れは溜まっていくので、定期的に掃除、点検をする必要がある。また、微生物の力も利用しているのだが、洗剤などを多く使用すると、その力を抑制してしまうことがあるそうだ。このような注意点は下水道でも言えることだ。どの家庭でも、「油をそのまま流さない」「残飯などが流れないように排水口にネットをつける」「洗剤やシャンプー、石けんなどを多く使い過ぎない」など、下水処理場や浄化槽の負担を減らす工夫はできるはずだ。

自然は時に人にとって恐ろしいものとなる。先日の熊本地震でも、そのことを思い知らされた。毎日のように訪れる余震に夜も寝られなかった。熊本県では断水が続いた地区も多かったようだ。熊本に隣接した、ここ高千穂でも一時断水する地域があった。自然災害の多い日本では、いつ、どこで断水してもおかしくない。

昔は神として崇めていた水を、人間は汚してしまった。しかし、きれいにするために様々な工夫をしてきたのも人間だ。始めに書いた八大龍王水神社の龍神は蛇の姿をしているそうだ。僕らが使う蛇口という言葉には、そういった神の姿が重ね合わせられているのかもしれない。この先、その蛇口から水が出てこなくなることも考えられる。僕たちはそのことを意識しながら水を大切にしていく必要があると思う。水の神様の怒りに触れないためにも―。

入選

水と平和を考える

鹿児島県　鹿児島市立坂元中学校　三年　福山　美桜

くじらが潮を吹くように、勢いよく空に向かって水があふれ出てくる。これは、私が今までもっていた噴水に対する印象である。私は、そのような噴水の光景を目にすることが、当たり前だと考えていた。しかし、そのような考えは祖父の話を聞いてからがらりと変わり、水に対して見つめ直す機会ともなった。

祖父の年齢は、七十九歳。戦争の経験者である。祖父はよく私に、

「物は大事に扱いなさい。」

「家族を大切にしなさい。」

「ご飯は残さず食べなさい。」

と、言ってくる。私が歯磨きをしているとき、水を流しっぱなしにしていると、

「水を流しっぱなしにしてはいけないよ。おじいちゃんが小学生の頃はねえ、綺麗な水が使えなくて川の水を使うことがよくあったんだ。空襲で防空壕に避難したときは、暑くて暑くてたまらなかった。喉も渇いたけど、飲み水は限られていたからねえ。今の時代には考えられない話だよ。」と、祖父が思い出話のようにさらりと言ったので、私は驚いた。

その他にも、戦争の間の水の内容で印象的だった話が二つある。一つ目は、お風呂の話だ。現在は、最低一日一回は入るお風呂。しかし、祖父が子どもの時代は、一日一回など考えられなかったそうだ。湯船につかるための浴槽は、少ない水で肩までつかれるようにと、底をとても深くして今のような横に足を伸ばすような形ではなく、円柱の形をしていて、立ったまま湯船につかっていたらしい。

二つ目は、飲み水の話だ。現在、飲み水は当然のように、なんの苦労もしないで飲める。しかし、お風呂と同様、飲み水が飲めるのも大変苦労が必要だったと祖父は言う。その他のエピソードとして、

「おじいちゃんが小学生の頃はねえ、飲めるような水が家になくて、遠い農家の人の家まで着物とか下駄とか持って行って、水や食べ物と物々交換することもあったんだよ。」

と、祖父は言う。現在、飲み水や食べ物と着物や下駄の価値を考えると、着物や下駄の方が高価だと考えるのが一般的なのだろう。しかし、この当時は違ったと祖父は言う。

このような体験談を聞くと、住んでいる国は同じ国なのに、時代が変わるだけで、現代の私たちの生活とは、まるで別世界のような、想像もできないような厳しい生活を強いられていたということが分かる。祖父の子ども時代と今の私の日常の違いは、戦争が起こったか起こっていないかだけの違いだ。祖父が

「物は大事に扱いなさい。」と、言うのは子どもの頃に大事にしていた宝物が空襲で避難した際に、無くなったからであり、祖父が

「家族を大切にしなさい。」と、言うのは戦争によって実の両親が亡くなってしまい、親戚に養子として育てられたからであり、祖父が

「ご飯は残さず食べなさい。」と、言うのは今のように一日三食しっかり食べられない日が続き、栄養失調で倒れた体験をしたことがあるからで、何よりも祖父が口うるさく言う

「水に感謝しなさい。」と、いう言葉は、子どもの頃お風呂の水や、飲み水に苦労したからである。

祖父の口から出てくる言葉は、全て子どもの頃の体験談が元になっている。「水に感謝しなさい。」という言葉も、祖父だからこそ言える言葉なのだろう。私は祖父の話を聞いてから、水に感謝するようになった。

くじらが潮を吹くように、勢いよく空に向かってあふれ出てくる水は、無限にある訳ではない。また、世界平和の象徴だと思う。これは今、私が考える噴水に対する印象である。

入選

未来へ水を届けるために

沖縄県　宮古島市立北中学校　三年　奥平　芽衣

太陽の下で青々と輝くゴーヤ。幼い頃、祖父と姉と三人で、よく畑に出かけた。一緒に育てたゴーヤは、お店に並ぶものよりも特別に美味しかった。畑に行くと、まず最初に雑草抜きから始まり、野菜の下葉を取って手入れをし、最後は必ず水かけで終わる。祖父は、「美味しくなるように、いっぱい水をかけなさい。美味しい野菜を作るには、たくさんの水が必要なんだよ。」といつも話していた。ホースから勢いよく流れ出てくる水が、土の中にどんどん吸い込まれていき、どの野菜も生き生きとして見える。そして畑仕事の後、木陰で飲んだ一杯の水は、体中から力が溢れてくるようで格別だった。「昔は、野菜を育てる水も、みんなが飲む水も雨水を貯めたり、湧き水のある遠い場所まで水汲みに一日何度も行っていたんだよ。水を得るのは本当に大変なことだったさぁ。」という祖父の言葉を、今でも覚えている。祖父との畑仕事を通して、野菜づくりにも、もちろん人間にも水は欠かせないものなのだということを、自然と感じてきた。

今でこそ農業の盛んな沖縄県だが、水を得るために先人たちは様々な苦労をしてきた。夏の降水量が少ない時期になると、沖縄の各地では、渇水に悩まされてきた。渇水による干ばつで、農家の人々の努力も空しく、農作物が不作になってしまっていた。私の暮らしている宮古島も、現在はさとうきび、葉たばこ、野菜や果物を生産し、全国にもその味を届けているが、かつては「水の乏しい島」であった。島全体がサンゴ礁でできた琉球石灰岩のため、雨水は地中を通って海へ流れてしまっていた。このような状況では、農業用水どころか、生活用水さえも得ることが難しかった。そんな島の人々にとって「井（がー）」と呼ばれる湧き水は重要なものだった。私の住む家の周辺にも、いくつかの井（がー）がある。道路よりも少し奥のひっそりとしたその場所には水音が響き、小さな生き物たちの姿もある。すり減った石段や壁を見ると、そこを人々が何度も通ってきたことが分かる。その様子から、島の人々が水と共に生きてきた証を見ているような気がしてくる。また、島の農業と深く関わるものに「地下ダム」がある。水が地下に流れてしまうという地層を生かし、地下にダムを造りそれを農業用水として活用しているのだ。完成まで二十年以上の歳月を要し、この地下ダムの建設によって島の農業はさらに発展したのだと思う。この島には、目には見えない豊かさも隠れているのだと知った。水を求めた数多くの人達の力があって島の農業が豊かになり、私たちが安心して水を口にできるということに改めて感謝した。一滴の水にも、ここに届くまでに長い道のりがあり多くの人々の様々な思いがあるということを考えていかなければならない。

現代の日本において、水の大切さについて真剣に考えている人はあまり多くはないのかもしれない。しかし、時代がどんなに変わろうとも、便利な世の中になろうとも、どんな場所にいようとも、水は命に関わる大切なものだ。水を守るために、私たちは何をしていけばよいのだろうか。水をもっと美しくするため、環境を守っていくこと。災害が起きた時、すべての人に水を届けるための準備をしておくこと。水を使う時間を短くすること。蛇口をきちんと閉めること。雨水を活用すること。私にできることは数少ないが、少しの水でも大切に思う心が、水を守り命を守っていくことへの第一歩になるのだ。

祖父が亡くなった後、畑にはゴーヤの苗が残った。水の大切さを考えるきっかけとなった祖父との畑仕事。水かけを、今日は貯めた雨水でやってみた。水の力を知ると、小さいけれど収穫の日を待つ青々とした実が、一層輝いて見えた。豊かな水を未来へ届けるために、私はできることから行動していきたい。

第３８回全日本中学生水の作文コンクール募集ポスター

第３８回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

１ 応 募 要 領

① テ ー マ ・・・「水について考える」（題名は自由）
② 対　　象 ・・・中学生（平成28年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
③ 原稿枚数 ・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
④ あ て 先 ・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあっては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
⑤ 応募期間 ・・・平成28年6月3日(金)までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
⑥ 版 権 等 ・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

２ 審　　査

応募作品15,246編のうち、各都道府県の地方審査を経た189編及び海外日本人学校より送付された20編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる36編を選出。平成28年7月8日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選26編あわせて36編の入賞作文を決定。

３ 表　　彰

（1）賞および賞品

賞		賞　品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞 農林水産大臣賞 経済産業大臣賞 国土交通大臣賞 環境大臣賞 水の週間実行委員会会長賞 独立行政法人水資源機構理事長賞 全日本中学校長会会長賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞	賞状、副賞
入　選		賞状、副賞

（2）表 彰 式　　最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成28年8月1日（月）に科学技術館サイエンスホールにて開催された「水を考えるつどい」において表彰

４ 中央審査委員（50音順、敬称略）

工藤　啓　　（独立行政法人水資源機構理事）
塩屋　俊一　（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（農林水産省水資源課長）
須磨　佳津江（フリーアナウンサー）
玉野井　晃　（公益社団法人日本水道協会調査部長）
長崎　宏子　（スポーツコンサルタント）
橋本　剛　　（全日本中学校長会編集部部長）
宮崎　正信　（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（厚生労働省水道課長）
山田　正人　（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（経済産業省地域産業基盤整備課長）
山本　景一　（内閣官房水循環政策本部事務局審議官）（国土交通省大臣官房審議官）
渡邊　康正　（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（環境省水環境課長）

５ 主 催 者 等

主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

第３８回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

	都道府県名		氏名		氏名		氏名		氏名		氏名
1	北海道	◎	池亀 廉（いけがめ れん）	○	倉田 友美（くらた ともみ）		小原 精夏（おばら きよか）		—		—
2	青森県		川下 碧（かわしも あおい）		佐藤 祐希（さとう ゆうき）	○	井上 凜士（いのうえ りひと）		小綿 唯斗（こわた ゆいと）		斉藤 柚穂（さいとう ゆずほ）
3	岩手県		菊池 美帆（きくち みほ）		多田 葵（ただ あおい）	○	菅原 颯（すがわら そう）		佐藤 香穂（さとう かほ）		菊池 彩夏（きくち あやか）
4	宮城県	○	土田 琴未（つちた ことみ）		村上 拓斗（むらかみ たくと）		勝山 康（かつやま やすし）		今野 蛍羽（こんの ほたば）	○	阿部 智香（あべ ともか）
5	秋田県		鳥井 ほのか（とりい）		泉 理子（いずみ りこ）		宮腰 花（みやこし はな）		—		—
6	山形県		皆川 詩音（みながわ しおん）		—		—		—		—
7	福島県		斉藤 優香（さいとう ゆうか）	○	鈴木 梨沙（すずき りさ）	○	関根 佑治（せきね ゆうじ）		新妻 凜（にいつま りん）		綿谷 楓（わたや かえで）
8	茨城県	○	茂呂 碧斗（もろ あおと）	○	粟野 遥輝（あわの はるき）		加藤 涼芳（かとう すずか）				
9	栃木県	○	糸井 あゆか（いとい）		中島 怜唯（なかじま れい）	◎	安藤 萌々愛（あんどう ももあ）		加藤 映見（かとう えみ）		
10	群馬県	○	髙井 智大（たかい ともひろ）		平山 果澄（ひらやま かすみ）		志賀 玄宜（しが はるたか）	◎	小川 知映（おがわ ともえ）		荻原 菜々子（おぎわら ななこ）
11	埼玉県	◎	山口 夏果（やまぐち なつか）		辻井 優希（つじい ゆうき）		西 琉碧空（にし るそら）		川添 真理子（かわぞえ まりこ）		篠崎 菜穂（しのざき なほ）
12	千葉県		宇惠野 岬（うえの みさき）		深山 涼（みやま すず）		永澤 翼（ながさわ つばさ）		横張 夏萌（よこはり なつめ）		栗原 麻衣（くりはら まい）
13	東京都		川添 愛加（かわぞえ あいか）		大塚 怜奈（おおつか れな）		亀山 芳（かめやま かおる）		—		—
14	神奈川県	◎	関 日陽（せき ひなた）	○	山本 雄介（やまもと ゆうすけ）		田添 愛実（たぞえ まなみ）		山谷 真生（やまたに まさき）		鈴木 瑳笑（すずき さえみ）
			本田 慧（ほんだ けい）		佐光 真緒（さみつ まお）		森田 実和（もりた みわ）		—		—
15	新潟県		鴇崎 真衣（ときざき まい）		山崎 光紗（やまざき みさ）		大山 璃桜（おおやま りお）		清水 朋華（しみず ともか）		本保 巴菜子（ほんぼ はなこ）
16	富山県		石川 太洋（いしかわ たいよう）		菅野 瑞希（すがの みずき）	☆	前田 野乃葉（まえだ ののは）		—		—
17	石川県		—		—		—		—		—
18	福井県		—		—		—		—		—
19	山梨県		—		—		—		—		—
20	長野県	○	柳澤 侑美（やなぎさわ ゆみ）		土屋 聖（つちや ひじり）		桑原 千聡（くわはら ちさと）		松村 拓音（まつむら たくと）		久保村 奏（くぼむら かなで）
21	岐阜県		福富 千陽（ふくとみ ちはる）		立川 真央（たちかわ まお）		山本 結惟（やまもと ゆい）		長谷川 紅梅（はせがわ こうめ）		杉山 美音（すぎやま みおん）
22	静岡県		内藤 航（ないとう こう）	○	田中 朱理（たなか あかり）		大橋 若菜（おおはし わかな）		白川 乃倫子（しらかわ のりこ）		橋本 瑠孔（はしもと るうく）
23	愛知県		稲葉 朱里（いなば あかり）		地名坊 来未（じなぼう くみ）		宮田 亜門（みやた あもん）		可知 由梨奈（かち ゆりな）		山本 想真（やまもと そうま）
24	三重県		田中 雅樹（たなか まさき）		瀬分 葵（せわけ あおい）		花田 彩芽（はなだ あやめ）	○	水野 亜美（みずの あみ）		田中 優芽（たなか ゆめ）
25	滋賀県		守田 美沙樹（もりた みさき）		石田 萌瑛（いしだ もえ）		前田 優馬（まえだ ゆうま）		—		—
26	京都府	○	中村 姫菜（なかむら ひな）	◎	河井 紀乃（かわい のの）		横山 寧々（よこやま ねね）		小川 朱夏（おがわ しゅか）		木村 珠都（きむら みさと）
			園田 理玖磨（そのだ りくま）		前田 葵（まえだ あおい）		梅原 創明（うめはら そうめい）		山本 澪（やまもと みお）		—
27	大阪府	◎	石谷 優翔（いしたに ゆうと）		山崎 咲菜（やまざき さな）		松本 彩（まつもと あや）		加藤 清花（かとう きよか）		横田 愛結（よこた あゆ）
28	兵庫県		吉井 奈緒（よしい なお）		長田 青空（おさだ そら）		大村 なほ子（おおむら）		水精 思音（みなもり しおん）		大村 花澄（おおむら かすみ）
			奥村 悠花（おくむら ゆうか）		山根 春奈（やまね はるな）		川村 恵茉（かわむら えま）		—		—
29	奈良県		椎野 真心（しいの まこ）		堀 杏菜（ほり あんな）		東野 恭子（ひがしの きょうこ）		井阪 未来（いさか みく）		小屋 成輝（こや せいき）
30	和歌山県		松浦 綾子（まつうら あやこ）		井本 初音（いもと はつね）		東 茉那美（あずま まなみ）		—		—
31	鳥取県		足川 蓮華（あしかわ れんか）		—		—		—		—
32	島根県		—		—		—		—		—
33	岡山県	○	稲田 知陽（いなだ ちはる）		富田 浩暉（とみた ひろき）		佐藤 千優（さとう ちひろ）		—		—
34	広島県		井上 智貴（いのうえ ともき）		大久保 葵彩（おおくぼ あおい）		大村 風歌（おおむら ふうか）		—		—
35	山口県	○	田中 美伶（たなか みれい）		山田 千聖（やまだ ちさと）		齋藤 萌香（さいとう もえか）		—		—
36	徳島県		野田 亜寿佳（のだ あすか）		漢那 遥花（かんな はるか）		中山 楓音（なかやま かのん）		中原 郁李（なかはら いくり）	○	松本 遥花（まつもと はるか）
37	香川県	○	竹村 舞祐（たけむら みゆ）		水尾 祐介（みずお ゆうすけ）		—		—		—
38	愛媛県	○	松本 彩花（まつもと あやか）	○	芝辻 隼人（しばつじ はやと）		向井 文音（むかい あやね）		中根 希望（なかね のぞみ）		坂本 きずな（さかもと）
			藤村 隆史（ふじむら たかし）		—		—		—		—
39	高知県		—		—		—		—		—
40	福岡県		田川 未時（たがわ みと）		堀内 知果（ほりうち ともか）		前田 菜緒（まえだ なお）		濱崎 未羽（はまさき みお）		緒方 千華（おがた ちはな）
41	佐賀県		松信 暖海（まつのぶ あみ）		宮崎 愛（みやざき あい）		稲冨 智子（いなどみ ともこ）		大嶋 千優（おおしま ちひろ）		髙瀬 怜央（たかせ れお）
42	長崎県		平川 颯絵（ひらかわ さえ）		寺田 梨佳子（てらだ りかこ）		岩崎 花連（いわさき かれん）		草野 碧（くさの あおい）		大浦 向日葵（おおうら ひまり）
43	熊本県		福永 梨乃（ふくなが りの）		児玉 幸大（こだま こうた）		高木 南緒（たかき なお）		中野 桜（なかの さくら）		岡本 凛奈（おかもと りんな）
			徳永 菜（とくなが さい）		—		—		—		—
44	大分県	○	佐藤 千春（さとう ちはる）		秋吉 ほのか（あきよし）		清家 玲里（せいけ れいり）		—		—
45	宮崎県	○	崎村 宙央（さきむら そらお）	◎	吉永 茉利香（よしなが まりか）	○	黒木 陽斗（くろぎ あきと）		櫻井 暁帆（さくらい あきほ）		菊池 真奈（きくち まな）
46	鹿児島県	○	福山 美桜（ふくやま みお）		肥後 佑佳（ひご ゆうか）		中目 湧斗（なかめ ゆうと）		松元 凜空（まつもと りあ）		田代 紗彩（たしろ さあや）
47	沖縄県	◎	山川 梨緒（やまかわ りお）	○	奥平 芽衣（おくひら めい）		比嘉 紗利奈（ひが さりな）		野原 大雅（のはら たいが）		知念 凛（ちねん りん）
48	海外		—		—		—		—		—

（注）氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選、その他は佳作。

第３８回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査優秀者数（編）	応募学校数	応募総数（編）			
				１年	２年	３年
北海道	3	9	100	20	21	59
青森県	5	4	292	68	77	147
岩手県	5	5	53	1	46	6
宮城県	5	8	23	0	5	18
秋田県	3	1	14	0	0	14
山形県	1	1	1	0	1	0
福島県	5	16	675	149	176	350
茨城県	3	8	415	141	208	66
栃木県	5	6	343	76	129	138
群馬県	5	5	476	19	183	274
埼玉県	5	6	289	75	112	102
千葉県	5	5	436	99	52	285
東京都	3	5	354	23	125	206
神奈川県	8	14	1,181	489	430	262
新潟県	5	4	29	12	6	11
富山県	3	4	377	99	107	171
石川県	0	0	0	0	0	0
福井県	0	0	0	0	0	0
山梨県	0	0	0	0	0	0
長野県	5	1	24	0	0	24
岐阜県	5	2	147	3	12	132
静岡県	5	10	666	349	203	114
愛知県	5	6	216	72	77	67
三重県	5	4	526	230	252	44
滋賀県	3	3	197	175	15	7
京都府	9	7	673	246	254	173
大阪府	5	5	393	152	180	61
兵庫県	8	9	1,058	351	441	266
奈良県	5	7	310	40	107	163
和歌山県	3	11	980	318	418	244
鳥取県	1	1	1	0	0	1
島根県	0	0	0	0	0	0
岡山県	3	2	3	1	0	2
広島県	3	3	311	296	0	15
山口県	3	5	29	8	11	10
徳島県	5	4	8	0	3	5
香川県	2	17	68	29	36	3
愛媛県	6	20	719	1	606	112
高知県	0	2	2	0	0	2
福岡県	5	9	849	0	515	334
佐賀県	5	23	588	306	282	0
長崎県	5	5	367	74	220	73
熊本県	6	18	1,335	349	637	349
大分県	3	3	7	2	1	4
宮崎県	5	11	245	66	42	137
鹿児島県	5	8	390	161	107	122
沖縄県	5	15	56	17	13	26
海外	20	2	20	16	0	4
合計	209	314	15,246	4,533	6,110	4,603

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応　募 学校数	応　募 総　数	性別		学年別		
				男	女	１年	２年	３年
		（校）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
合　計		17,501	486,461			169,175	172,659	144,424

（注）・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
（教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮）
・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名、第37回においては学年未記入者6名を学年別集計から除いている。

第３８回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品15,246編の中から選ばれた最優秀賞１編と優秀賞９編の受賞者の表彰式は、平成28年8月1日（月）に東京都千代田区の科学技術館サイエンスホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。

最優秀作文の朗読
富山県　高岡市立五位中学校３年　前田　野乃葉さん（内閣総理大臣賞受賞者）

作文コンクール受賞者と各賞授与者

国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部
〒100－8918　東京都千代田区霞が関２－１－３
電話　（03）5253－8111（代表）
ホームページ
http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html